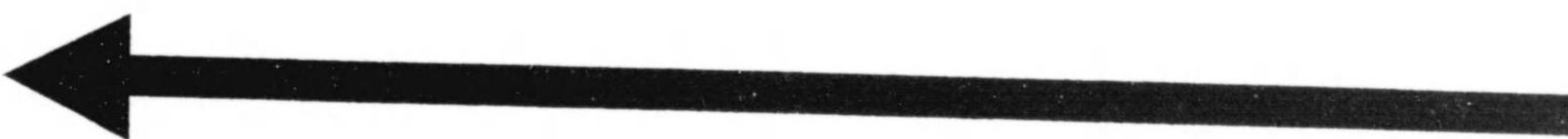




320
648

始



特232
130



池田小菊著

と
綴方教育

東京明治圖書株式會社



子供と綴方教育

目次

第一講 今の子供と、これからの子供……………一

- (一)過去の子供……………(二)この頃の子供……………(三)教育の躍進時代……………(四)綴方に出てくるこの頃の子供……………(五)文例「お母さんの帯」「推薦」其他……………
- (六)傾向批判……………(七)主義、式後育の末期……………(八)これからの教師……………
- (九)綴方の仕事……………

第二講 教室の気分……………四三

- (一)私と子供達……………(二)教室は明るい子供部屋……………(三)學説をぬきにした教育……………
- (四)着物と花と鳥……………(五)教室の母の實感……………(六)思ひ出……………
- (七)強ひずに生れた綴方……………(八)子供達への感謝……………

第三講 子供の氣品……………五七

(一)母の心と教師の心……………(二)個性は働く……………(三)倦きの来ない子供……………
(四)教師の氣品と綴方

第四講 この綴方とこの實感……………六七

(一)習慣的な心構へを毀して……………(二)文例「お祖母さんの死」……………(三)誇張のな
る孫心……………(四)文例「泥棒」……………(五)好意の持てる文……………(六)指導要領

第五講 感激の必然性……………九一

(一)子供の苦勞話……………(二)文例「綴方の番」……………(三)感激と故意と偶然……………
(四)指導要領……………(五)感激の貯へ

第六講 本當によい綴方とはどんなのを言ふか……………一〇七

(一)文例「お使」「おかず」「一人旅」……………(二)作者の個性のよく出てゐる文……………
(三)まづ中等……………(四)個性を乗趣へた文……………(五)まづ上の上……………(六)正し
くて美しいもの……………(七)指導要領

第七講 表現に就いての部分的な問題……………一四三

(一)文例「西瓜」……………(二)描寫の深さ……………(三)作者の自省……………(四)文例「六

甲山へ」……………(五)人物の描寫……………(六)文章のスタイル……………(七)場面の描寫

……………(八)季節の描寫……………(九)表現の完結……………(一〇)進歩のあと……………

(一一)綴方の四つの要素……………(一二)よき表現の例

第八講 材料について……………一五〇

(一)綴方の材料になることとならぬこと……………(二)綴方は全部子供藝術……………(三)

材料に對する作者の興味……………(四)文例「水の泡」「まはらない舌」「おとみちゃん」「病

床日記」

第九講 境遇と子供 (一)……………一五八

(一)文例「あるおばあさん」……………(二)正義感……………(三)少年魂……………(四)「ある

おばあさん」に就ての問答……………(五)文例「男と女」……………(六)女の子の心……………

(七)或る意味の好意と、或る意味の反感……………(八)文例「オーバー」……………(九)新鮮

な熱……………(一〇)怒……………(一一)指導要領

第十講 境遇と子供 (二)……………一五〇

(一)文例「女中」……………(二)特殊なもの……………(三)家庭の影響……………(四)苦笑の教

育……………(五)文例「お茶當番」……………(六)罪の出所(七)苦状の多い道德批判……………
(八)文例「勉教室」帽子の生地……………(九)この二つのもの……………(一〇)希望と美望
……………(一一)境遇の責任

第十一講 言葉について……………二九九

(一)文例「江戸つ子」……………(二)讀む言葉と話す言葉……………(三)學校の言葉……………
(四)表現と言葉

第十二講 その年頃の子供 (一)……………三二二

(一)綴方「江戸つ子」に就て……………(二)文例「白い靴」……………(三)この時期とこの要領
……………(四)文例「キュービীর服」……………(五)色と形と音……………(六)勉強と仕事

第十三講 その年頃の子供 (二)……………三三三

(一)文例「夜中」……………(二)好奇心……………(三)讀物のこと……………(四)夜の世界

第十四講 子供の種々相……………三四四

(一)五十人五十色……………(二)文例「白粉」小間物屋さん……………(三)十人の凡人と一
人の變り者

第十五講 讀本の材料と子供の綴方……………三五七

(一)文例「お手紙」……………(二)心と心の聞き

第一講 今の子供とこれからの子供

【一】過去の子供

とにかくにも、忠孝一天張りで教育された時代の子供の、權威者に對する崇敬の感は、むしろ恐怖に近いものだつたと思ふ。神とか佛とかいふ、非現實な權威に對しては無論のこと、大臣とか大將とか大發明家とかと言ふと、それはもう自分とは非常に遠い雲上の位置に祭込めて考へた。同様に親や教師に對しても、非常に引離した位置に自分を置いて、初めから威壓を感じてかゝつた。同じ時刻に輪に集つて同じ御馳走を喰べながら、親に對しては、慎しみ深さを、その心得から取外すことをしなかつた。教師の前では、常に手を膝に置き、心持伏し目に、謹慎の度を失はぬことを、優秀な態度だと心得てゐた。只それ等の個人的權威に對してだけといふのではない。總じて長上に對する心持が己にさう出来てゐて、權力者だといふと、頭から尊いものだと思つてかゝつて、無茶苦茶に自分の位置を引下げ、仰ぎみたものだつた。無論それは、子供特有の道德だつたといふのではなくて、規律のよい靜肅が何よりの平和で、靜かな嚴格が何よりの安寧だと思込んでゐたその頃の大人の道德意志が、子供といふ後繼者の心を、そのやうな形に縛上げてゐたことは言ふ迄もない。私共は、

そのやうな道德に育てられて、大人になつた子供である。強ひて私共の子供時代にまで逆上らなくとも、こゝ五年も前の子供は矢張りそれと大した差はなかつたと思ふ。

【二】この頃の子供

ところが、こゝ四五年の間に、子供達の態度が、目に見えて變り出した。これは私だけの感ではなく、七八年も前から教師をしてゐる人なら、大抵同様なことを感じてゐるさうに思はれる。數年前には、一年生に入學して來た子供達の顔を眺めてみて、この子こそと思ふやうな豊かなにこやかな顔は、滅多と見つからなかつた。餘程おませな子供でもない、笑つたり話したりなどしなかつた。どの子もどの子も、何か脅えたやうな固苦しい用心を、露骨にその表情に見せてゐるのが普通だつた。教師といふ權威者に對する奴隸的服従的な感情を、入學前にもうちゃんと準備させられて來てゐる用意のよい顔の行列だ。それ等を眺めて、幻滅と希望を同時に感じたことが、私の経験には可なり多い。一日中同じ校舎に暮してゐながら、彼等は中々親しんでは來なかつた。教師と子供の距離を近づけるためには、相當に長い時間と努力が要つ

たものだつた。しかし、この頃の子供にはさういふことがだんく、薄くなつた。殊に最近、教師に對する子供の態度が、非常に輕くなつて來た。變にこだはつたり、いぢけたりした様子をしなくなつた。前には一寸した注意をしても、すぐ叱られたとか怒られたとかと、その子自身は勿論、他の子供達まで、甚く腫を光らせたものだが、今の子供には、さういふことがなくなつた。輕い氣持で話合つて、至極無邪氣に彼等は聞分けてくれるやうになつた。笑ふ話す怒る泣くなど、彼等の表現が、非常に自由になつて來た。それを思ふにつけ、教育の仕事も、愈々轉換期にはいつたと強く感じる。一體學校でしてゐる教育の仕事は非常に尊いことに見えてゐて、その實誠に力弱い仕事だと思ふ。教師の方でどんなに力んでみたところが、家庭の道德、社會の道德がそれと並行して來ない限り、學校教育の効果などは、決して目に見えるものではない。寧ろ、家庭や社會から絶えず毀され損はれてゐるのが、學校の仕事だと思ふ。中には教師のいひつけはよく聞くが、親のいひつけは中々聞かないなどいつて口説く父兄もあるやうだが、さういふことはほんの部分的な小さい出來事だけのことだと私は思つてゐる。文字を教へて

貰ひ、繪を描き習はせて貰ふ先生と、生んで貰ひ、喰べさせて貰ひ着せて貰ひ、抱いて寝かせて貰ふ親とを比べてみて、子供の心に喰入る力の強弱を考へてみたらよい。子供の年齢が進み、相當な批判力が出來てからなら、また別だと思ふが。しかしさういふ場合でも、餘程意志の強い子供でもない、頼りにはならない。さういふ子供でも、家庭的な悲劇の中に監督されて終ふのが普通である。教育の自由を唱へ、子供の權利を叫んでは、異端者だとされて社會の片隅に埋没される人々の不遇を思ふ。どの社會にもさういふことはあるにしても、教育者の斃れ方の實に脆いを見る。とにかくにも、學校教育の仕事は、社會的にそれ程力弱いものだとしなければならぬ。その代り、逆に社會、家庭が進んで來た場合には、どの社會よりも調子よく力強く進むものだと思ふ。今といふ時代が、丁度さういふ時代、教育の船が、いゝ工合に上げ潮に乗り出した時代だと言つてよからうか。この頃の子供を見て、私はつくづくさう思ふ。

【三】教育の躍進時代

自由平等の思想が、思想として流行し出してから、もう十幾年にならう。それがまづ社會的に行渡つて、大人達

の日常行爲が、家庭的にも社會的にも、その思想に近い形に、だん／＼省察が重ねられて來た。自由平等が八釜しい議論を乗り越えて、思想から實踐道德に移つて來た。そこで、今迄子供達の上に冠さるかゝつてゐた凡ての威壓力が、自らだん／＼退却して行き出した。それが現代といふ時代を産み、現代の子供を産み出したのである。こゝ四五年この方の、子供の態度を見てみると、さういふことがはつきり感じられる。子供といふものは、自分で行列を作つて、大人に示威する事もしないし、宣言書を綴つて、大人に談判することをもしない代り、いざ重石がとれると、壓縮された空氣のやうに、急激な個性の膨脹を見せるものである。平生嚴肅な教室が、教師の缺勤で、はしやいだ熱と力が窓からあふれ出るやうな騒ぎの起ることは、私達の見聞に少い事實でないことから押しても、すぐ知れる道理だと思ふ。成長力の旺盛な子供の、自然な燃焼なのだ。そういふ燃焼が、今、社會的に子供達の上に来てゐるのである。社會的思想が、子供に影響するまでには、長い時間がかかる。大人が、まづ思想として受け入れ、それを自分の心に取込んで終つた上で、日常の行爲に移す。その結果でなければ、子供には觸れ出さ

ないのだから。ところが、愈々それが子供にまで届く時代が來ると、子供は大人よりも、もつともつと勇敢に、そして健康にその道を歩き出すものである。子供の成長は、理屈や議論に時間を費すのではなくして、行爲の上で眞直ぐ進むのだから。その上に、大人のやうに、不自由不平等な封建的因襲が、心の中に喰込んでゐることが、極めて少ないのだから。こゝ二十年もして、今の子供が大人になつて、社會的に仕事を仕出す時代が來たなら、世の中の實踐道德は非常に變ることだらうと思ふ。今の時代を昭和維新だといふが、間違ひもなくさうだといふ緊張した氣持がする。子供達の氣持が變り出したに連れて、自然彼等の持つ興味の内容が變つて來た。知りたがり、見たがり聞きたがり、言ひたがり考へたがることとが、だんだんに變つて來た。今迄通りの修身訓話や、讀本の材料ばかりをあてがつてゐたのでは満足してくれなくなつて來た。もつともつと進んだことを、子供は自分で考へ出し、一人で感じ出して來た。今迄にも勿論さういふ傾向はあつた。しかしそれは、子供自身の心から出て來た要求といふよりは、教育界の新人達の方で教育思想として、それを唱導したといふ形に過ぎなかつた。子供はやつ

ばり古い頭の教師から、古い形の教育を受けて、心の平穩を失はずに暮してゐた。不満は持つには持つても、不満を持つ方が悪いのだといふ風に、自分と自分で簡単にかたづけられてゐた。とにかくにも、子供の心は、ちゃんと奴隸的服従的に出来てゐたことだけは事實である。だから、教育界に新しい研究が起つても、大抵は一寸した流行ものになつて終つて、大勢が動き出すところまでは行かなかつた。しかし、今の場合、これからの場合は、全くさうではない。子供自身の態度が、まづ變り出して来たからには、教育の形は否でも應でも、今迄通りにじつと治つてゐることが出来なくなるのは當然である。今から數年、愈々教育の躍進時代だといふ氣がする。今迄のところ、教育界をすつと見渡してみても、遅れてゐるといひ進んでゐるといつても、大概は建築、設備、施設のやうな形式上のことで、一歩突つ込んだ精神内容の上には、それ程大した距りがなかつたやうに思ふ。しかし、こゝ數年の後には、そこには非常に異つた懸隔が現はれて來ることと思ふ。今現に、その距りが一段一段開きを大きくしつゝあることは事實である。教育界もまた前途春秋多しと言はなければならぬ。

【四】綴方に出てくるこの頃の子供

次に、子供達の綴方から、二三その例をひいてみよう。

【五】文例 お母さんの帯

(五年女兒)

お夕飯がすんで、お母さんが着物を着かけなさつた。私はちつと見てゐた。お母さんは帯を結ばうとしなさつた。私はその時、お母さんの何時もの帯の結び方を思ひ出した。

「お母ちゃん、帯きれいに結びや」

と、私は言つた。お母さんは、

「はあ」

といつて、結んで後向きになり、私に見せなさつた。私は思はず、「ふわあ」とうしろへもどつた。帯は重箱のやうで、おしりの方にぶらんと、さがりかけてゐた。

「もつと、あんばい結びさ。どこのお母さんかて、涼みの時だけなつと、あん

ばい結ばはるやろ」

「さうかて、お母ちゃん、涼みに行かへんもん、かまへんやろな」

「それでも、門かどに立つてたら、色々な人通らはるやろ、若し、私の組ぐみの子が通つたら『やあ、稻田さんのお母さん、もつさりした田舎の人みたいな』て笑わらてはつたら、私わたしかなはんやろ」

「それでも、あんた等さへ、きれいにしてゐたら、かまへやろな」

「なんぼなんでも、こんなんいらん」

と、私は、お母さんの帯をほどいた。お母さんは、いやな顔をしながら結びなほして、「そしたら、これでよいのんか」と、うしろを向きなさつた。私は首を傾けて見た。帯は、まへよりも、よいかつかうであつた。

「あのな、この間買うた、山みたいな模様ついた、あれしいさ」

「あつ苦し。」

お母さんは、おこり出しながら、おたいこの上の方のはしを引つばつて、山のやうにしてゐなさつた。お母さんは店の方へ行きなさつた。私は、「もし學校で

お母さんに來て下さいて言はれた時、あんなけつたいに結んで行つたら、かなはんなあ」

と、一人ごとを言つて店にいくと、お母さんは、門の方を見てゐなさつた。帯を見ると、割合よいかづかうであつた。

これに似た例で、大掃除の日のことを書いたものに、

お母さんは、手ぬぐひを姉さんかぶりにしてゐた。

「お母さん、若わかみえるわ」

私わたしはかう言つて、お母さんをひやかした。お母さんは、

「三十五六やそこらで、若みえるのはあたり前や、何も五十位のおばあさんおばあさんとちがふで」

といつた。

といふのがあつた。

斯ういふ例を、今時の子供の綴方から見出さうとすれば、いくらでもある。これは二つとも風采のことについてのものだが、その外どのやうな場合のものでもこの頃の子供の態度は一般にかういつた、親しみ深い、氣軽い傾向を持つやうになつてゐる。後の方の例では、母の年齢が三十五六といふのだから、子供との差が二十二三にしかならない。その位の違ひな姉妹はいくらでもあるのだから、關係は親子であつても、感情の上では姉妹に近い親しみの方が濃い場合も想像されなくはない。ところが、先の方の例では、母は五十に近い人で、あの子供は三番目か四番目の子で、女學校にゐる姉さんなども持つてゐる。しかし、あの綴方でみると、さういつた親子らしい距りが、少しも見えない。僅か十二ばかりの女の子が、五十近い女親に帶の結び方をよくするやうにと言ふ、母親はそれを眞面目に受け入れて、結び直す。そしてよいか悪いか見せる。あの様子はまるで歳に距りのない姉妹同志の仲のやうである。あゝいつた感情は、この頃の子供でこそ普通のやうに思へ出したが、ここ十年も前には、特別な家庭でもない、見られなかつたことだと思ふ。無論、その間がどんなに親しいにもせよ、學校の教師に

見せる綴方に、こだはりなくそれを書いたりするやうになつたのは、私の経験から見て、やつと四五年この方のことである。

或る子供が、「祖母さん死」といふのを書いた。その中に、

呼び起されて目をさました。あたりは未だ眞暗で、電燈がぼんやりともつてゐた。お父さんが枕もとで、

「良子、おばあさんが死んだで」

と言つた。私は意外の事に驚いて、

「え、死んだ。ほんまか」

と、目を見張つた。

私は起きて着物を着かけた。二月半ばの夜は寒かつた。ぶる／＼ふるへながらじつとお父さんの顔を見てゐた。

「三時半頃に息が切れたんやけどもな、起してやるかと思たんやけど、よう眠つてたからな、起さなかつてん。大勢来てくれるからな、一度見て来たつて

と言はれた。

といふところがある。それを讀んで、私はそこに幸福な子供の姿を見る感がした。私共が子供の時代には、決してこんな一人前の待遇など受けはしなかつた。殊に父親から斯ういふ場合に、「死んだ時に起さうかと思つたが、よく眠つてゐたから止めて置いたのだ」といふやうな言葉で、當然起して死目に合はすべき筈のものを、さうさせなかつた理由を、辯解されたりしたこともなければ、「大勢來てゐるから、お前も起きて一寸見て來ておやり」などといつた、一人前扱ひなど受けたことはなかつた。家庭的に起る事件は、大小にかゝはらず、大人の間でさつさと片づけられ、子供は只必要な場合にだけ、何にも知らないなりに、大人の命令通りに引出される位のことだつた。しかし今時は、少し教養のある親なら、もうそんな態度はとらなくなつた。何の教養もない親であつても、社會一般の氣分に押されて、それが子供に對する親としての普通の態度になりつゝある。子供の世界

が、一日一日斯うして幸福になつて行くことを、私はしみじみ感じる。

次にあげる「推薦」といふのは、彼女達が愈々小學校を卒業して、女學校に進む場合の出來事をかいたものである。私の學校では、女學校といつても、普通は自分の學校内の附屬高女に進むので、成績によつて「推薦」されることになつてゐる。その選に洩れた者は、他の女學校の入學試験を受けるなり、高等科に残るなり、その場合適當な方法をとらなければならぬことになるので、子供達も親達もこの「推薦」を非常に心配するのである。この文には、その時の感じが、誠に如實に出てゐる。文章としては、多少荒削りな感があり、無駄もあり、それ程よいものだといふことは出來ないが、これを讀むと、現代式の子供の特徴が、實によく解ると思ふ。

推 薦

(六年女兒)

六時間目の鐘がけたましくなつた。皆は一度に「やあ」と叫んだ。潮田先生(教生)もお話中だつたのに笑ひ出しなかつた。後を見ると、知らない教生

先生が、へんなきよとんとした顔で、見廻していらつしやつた。西島先生（教生）は知つていらつしやつたのか、袂で口をかくして意味ありげに笑つてゐなかつた。私は胸に手をあて、横のよつちやんを見た。よつちやんもこちらを見て、からだをゆすつてゐた。すると、誰か「やかましいわ」といつた。皆だまつてしまつた。それから、又潮田先生のお話がつゞいた。

しばらくして、がら／＼とドアがあいた。潮田先生を放つておいて、戸口を見た。池田先生がにこ／＼笑ひながら、腕を組んで、口先をとんがらせながらは入つていらつしやつた。池田先生は「ハ、ハ、ハ」と笑ひながら、袂から手紙の束をちよつと出して見せなかつた。私はそれを見ると、やつぱしこはい様なられしい様な變な氣がして、思はず机にうつぶして「ウフフウ」と笑つた。

「よう、もう自信あるさかい、喜んでるね。ほう／＼」
と、誰かどひやかした。

「やあ、なんやの」

と、私は泣くまねをした。なんだか泣き笑ひがしたいやうな、じれつたい氣が

した。

「さあ、お終ひにしませう」

と、潮田先生がおつしやつた。私は池田先生の方をそつと見ながら、おじぎした。私はすぐ、稲田さんの所へ、とんでいつた。

「私わたくしすべつたら、黙つてるで。黙つてたらすべつたんやと思うててや。」

と、私が言ふと、春子さんが横から、

「もし、あんた等二人すべつたら、ピアノ百台と、オルガン百台と、花あるだけ上げるわ」

と、口に手をあて、笑ひながらいつた。

「やあ、あんたこそや。なあ」

と、稲田さんと肩を組んで笑つた。池田先生は、しばらくの間、ストーヴのそばで、潮田先生と話をしていなかつたが、

「皆お席につきなさい」

と、おつしやつた。後を見ると、よその教生先生は、いつのまにかゐなかつた。

西島先生一人が、壁にもたれて、廣瀬さんと話していらつしやつた。

「やあ、歸つてほしいわあ。」

と、よつちやんと顔を並べていつた。先生は笑つてゐた。西島先生は、

「あんた達の泣く顔や、喜ぶ顔がみたいのよ。アハ、ハ、ハ、」

と、又袂で口をかくして、さもうれしさうに笑つた。

「やあ、いち悪やな。早よ歸つてほしいわ」

と、口々に言ふと、しばらくして、

「ぢや歸るわ」

と、笑つて、くるつと一べん廻つて歸つて行きなかつた。みな又口々に話し出した。ガラ／＼とドアがあいて、いつの間どこへ行つていらつしやつたのか、池田先生がまゆ毛に入の字をよせながら、は入つて來なかつた。そのあとから旭先生(教生)と、飯島先生(教生)とが、うれしさうには入つて來た。

「やあ、かなはん」

と、三人の先生の方を見て、皆はさはぎ出した。

「やかましい。もう今日は気分が悪いから、静かにしてゐないと、推薦して上げないよ。」

と、教生先生の方を見ながら、池田先生は笑つておつしやつた。皆静かにした。池田先生は自分の机についた。

「今年は、私がすい分長く病氣をして、皆さんに推薦の事について、すい分心配させたけど、そのかはり、私も一人でも多く推薦させようとして、すい分骨を折つた。それで」

私は其のあと、どうなのだらうと思ひながら、心配して聞いてゐた。

「主事さんが、『池田さん』と度々呼んで、此の子は體操六點だが、どうしてちや。此の子は、どれ／＼がどうだ。とむつかしいことばかりいつて、なか／＼よくおこられた。何時もなら口答へをするんだけど、一人でも多く入れたいから、へい／＼といつて、一人につき十べんも頭をさげた。五十二人について、五百二十べんも頭をさげた事になるのだ」

と、教生先生や、私達の方を見ながら、自慢さうに笑つておつしやつた。

「それで、今年は、希望した者は大方皆推薦してもらへて、こんなうれしいことはなう」

と、推薦の事について話して下さつた。私はほつと安心した。

「それで、アイウエオ順に、静かに廊下に並んで下さい」

といつて、袂から手紙を出して「アハハ、」と、満足さうに、大きな口をあいて笑ひなかつた。「やあ」と言つて、私は手紙をにらんだ。

「さあ出なさい」

とおつしやつたので、私達はさわぎながら、廊下に出た。荒井さんは、まだわからないのに泣いてゐた。

「やあ、私かて、泣かんならんのやつたら、どうしよう」

と、つるしてある横のオーパーに顔をうめた。一番先に、浅田さんがはいつた。急にさはめいた。少したつて、浅田さんがこゝとして、急いで出て来た。

「やあ、あの子、は入れたんやで」

と、一入つぶやきながら足ぶみをした。うしろの方で誰か「何と言ははつた

か」

と聞いてゐた。もう赤井さんが出て来た。赤井さんはオーパーをさげて、ベロツと舌を出しながら、急いで歸つて行つた。

「やあ、あの子、どうやつたんやろ」

と思ひながらゐると、もう荒井さんが出て来た。荒井さんは、初め泣いては入つたのに、もう出て来る時は、にこゝとしてゐた。

「あの子、は入れたんやわ」と思ふうちに、すん／＼番が近づいて来た。しばらくして、稲田さんが、やつばし、こらへ切れなささうに、にこゝして出て来た。

「やあ、いなご、はいつてんやろ」

といふと、「ううん、ううん」と、にこゝしながら走つて行つた。いよ／＼次になつた。やつぱり胸がどき／＼した。そして、「きやあ、」と言ひたい氣がした。石崎さんが出て来た。私は、入れ代りにはいつた。教生先生の机には、封筒が一面にならべてあつた。先生の前へ行くと、顔を見せるのが、はづかし

い氣がして、兩手で顔をおほふた。池田先生は、いやに落ちついて、目がねを取つて、目をぬぐうて、しばらくちつと見つめていらつしやつた。が、いういうとして、「はい立派に本科へはいれました」

とおつしやつた。私は思はず「やあ」とさけんで、手紙を受取つたまゝ、とび上つた。四人の先生は、「ハハ、、、」と笑ひなさつた。はづかしくなつて、お禮も忘れて、とんで出た。

カバンや、おべんとう箱や、裁縫箱を兩手にひつさげて、階段をころぶやうにおりた。

「やあ、はいれたんやわ」

と、誰かといつてゐた。下駄箱の所へ來ると、稲田さんがゐた。笑ひを止まらせようとしたが、顔が、くじけるやうに、にこ／＼として來て、とまらなかつた。

「稲田さん。あんた、はいれたんやろ。私かて」と言つて抱きついた。

「私かて」

二人は抱き合つた。

「やあ、はよ歸ろ」

と、門まで來て、靴もとめず、にこ／＼しながら走り出した。辻で自転車にぶつかりかけた。皆人が振り返りなさつた。そんな事おかまひなしに、はあ／＼しながら、一人笑つて走つた。途中、知つてゐる人に會つたが、そこ／＼にお禮をして走りつゞけた。おべんとうとシヨールが、落ちさうになつて來た。ほんとに何かの物賣のやうに、ちがつた色々の物を、たくさん兩手にかゝへてゐる事を、自分で思つて、一人「ウフ、、、」と笑ひ出した。途中で、走りながら、歸つて駄目だつたと、うそ言うたらうかと思つてゐたが、眞に笑へて／＼氣がういて來た。しばらくすると、ズロースが、ぼつ／＼下り出した。引上げようとしたが、兩手に色々一杯持つてゐるので、引上げられなかつた。

「もうちきや、しんぼうせい」

と思つて、やう／＼家についた。同時に、ズロースが下つて、裁縫箱とおべん

とう箱が、がちやんと落ちた。その音を聞いて、姉さんと女中と、お母さんが出て来た。

「秀ちやん、何したの、その風は」と、ズロースを指して言った。

「はあ〜。うん。あのな、お母ちやん」

と、ズロースを踏みぬぎながら、庭中をかけ廻つた。姉さんはきよ、んととして、

「なんやの、氣狂うたのか」

と言つて笑ひ出した。

「いゝや、本科へ推薦出来たんや」

と靴をバアツとけつて、上にとび上つて、お母さんに抱きついた。

「やあ、本とうか。そりやうらしい」

と、お母さんは、目を細うして、下駄をはいて、外へ出て行つた。私は、

「へエ」と、あつけにとられながら、後を追つて行くと、事務所へ行つて、お父さんに知らせて来ると、とぶやうに走つていきなされた。私は外を見ながら

につこり笑つて、家へ走つて歸つた。歸ると、女中が、ズロースとカバンの後しまつをしてゐた。私は思はず吹き出した。背や顔に汗がにちんでゐた。

この綴方を見て解るやうに、この頃の子供の言つたりしたりすることが、非常に明けつ放しである。今迄の子供なら、教師に見せる綴方などに、教師その人のことを書いたりなど却々しなかつた。書くにしても、悪口になるやうなことには、細心な注意を拂つて、決して近寄らなかつたものである。とにかくにも體裁のいゝことばかり書いたものである。しかし、この頃の子供は、さういふことには可なり無頓着になつて来た。體裁のいゝことばかり言つて、教師の氣に取入らうとするやうな邪氣を持つ子供が、だん〜に減つて行く。無論教師にだけといふのではない。誰に對してもこの調子なのだから、非常に觸りがよく、交際易くなつた。見方によつては、無遠慮とも思へる。しかし恥かしがるべき所では恥かしがつて居り、控へ目にすべき所では、たしなんでゐる。只、不必要な遠慮や、廻りくどい氣使ひをしないやうになつて来たのである。大體この文の作者は、平生よ

くは、し、や、ぐ、子なのだが、文章に出てくる「私」といふ子供も、なか／＼よくは、し、や、いで見える。従つて子供自身の感情には、多少の誇張があるやうにも感じられる。この點、この子供の作品態度はまだそこまで清澄なものになつてゐないからである。私が先刻、これはそれ程よい作品だとは言へないが、と、言つたのはそこである。しかし、この話は、別に後で詳しく述べるとして、ここではその方面の問題には暫く觸れないことにする。が、とにかく随分は、し、や、いだ子供の姿が想像される。これ程のは、し、や、ぎ方は、この子特有のものであるにしても、一般にかう言つた傾向を、この頃の子供はみんな持つてゐる。それから、喜び方なども、すぐ抱きついたり抱合つたりする。こんなことも、近頃の子供に見る表現形式である。物の見方感じ方などにしても、前頃の子供とは違つて、随分複雑になつて來た。授業の終ひ頃のところから、教師が手紙の束を持つて這入つてくるあたり自分が手紙を貰ひに行くあたりの、相手の表情素振りなどの観察ぶりは、子供たと馬鹿に出來ない鋭いものだと思ふ。一體にこの頃の子供は、こんな風に、みんな却々利巧である。

【六】傾向批判

さて、斯ういつた傾向は、教育の立場から見ても、非常に喜ばしいことであることは言ふ迄もない。これを善いものに育てるか育てられないかは、教師の胸にあることだが、こんなに開けて來た子供の心を、よく育てることが出來ないとするなら、その教師には、子供を育てる能がないのだと言はねばならぬ。この傾向を見て、中には、忠孝一天張りの道德の頽敗を悲しむ人もないとはせぬ。しかし、先刻から擧げた例について、出てくる母親、教師、と、子供との交渉ぶりを見て、私はさういつた道德の頽敗などを、少しも感じない。どんなに親しくしてゐても、どんなに無遠慮に見えてゐても、親しい中無遠慮な中に、立派に親らしい教師らしい威嚴が保たれてゐる。つけ双のやうな不自然な威力が、いかにも重苦しいものに見えてゐるのではなくて、長上に對する懐しみ深い態度が、自然な姿で信頼の情を見せてゐることを何よりも喜ぶ。これが長上の持つべき本當の權威であり、子供の感じる道德意識であると思ふ。凡ての正しい道德は、虚偽のないこの信頼の感の中からのみ生れる。忠といひ孝といふ道德も、ここに根を下し、ここから芽ぐんだものでなければ、眞剣なものだ

とは言ひ得ない。無論、昔のやうに、長上との間に、きつちりとした懸隔がないだけ、悪くすると、とんでもない状態に陥らないとは限らない。しかしそれは、長上が自ら彼等の信頼を裏切つた時にだけ起る現象なので、長上自身の自己省察に油断がないなら、さういふ心配は無用なことである。若しこれからの教師の中に、初めの間非常に子供から信頼され、敬愛されてゐたのが、だんだんにその感情が薄れて、遂に子供達の心が、他の教師に移つて行くやうな場合に出逢ふ人があつても、泣いたり妬んだりすることはいらなうと思ふ。誤解曲解から來ることだ、わりからの場合は別として、凡そ心の成長のない教師に、何時迄も義務的な敬愛を捧げて、體裁を胡麻化すやうな子供は、どうせこれからの子供のしない心得だから。これからの教師は面白い。實に愉快だと思ふ。子供同様、一日一日勉強し成長して、自分自身の心の姿を、正しく美しい調和よいものに育て、行かなければならないのだから。無理が利いたり、威力で壓へられたり出來なく、だんだんになつて行くのだから。何といつても、今迄の教師は眠つてゐた。怠つてゐた。形にばかり捉はれてゐて、心の省察を忘れてゐた。従つて凡てに新鮮な熱がなく

活動力を失つてゐた。一通りの道德律で、一切を片附けて行けた過去では、それが當然な態度であつたのだ。何と長く沈滞を續けて來た教育界であつたことか。しかし、教育界にも愈々轉換期が來た。目覺しかるべき躍進時代が來た。教師が言葉の上だけでなく、本當の愛の生活に這入られるのはこれからである。仕事を樂しみ、仕事に生きられる日のくるのも、これからである。思つても愉快的氣持がする。

【七】主義、式、教育の末期

かういふ風に、子供の氣分が變り、教育の態度に轉換が來てみると、教師は誰しも、今迄自分の心に持つて來た教育方針に就いて願ふことと思ふ。そして、自分の教育精神に省察を加へることと思ふ。何とか教育、何とか教育と、自分の精神の色分を試すことでもあらう。しかし、これからの教育は、主義では出來なくなるばかりである。何々主義の教育、何々式の教育といふ、その主義、式、の教育では間に合はなくなるばかりである。主義とか式とかいふのは抽象のもので、それを考出したその人であつてこそ、身についた術であつたに違ひないが、その人とは別な性格をも

つた、他の個性者までが誰も皆、その人通りに甘く効果を擧げ得ることは、まづないとしなければならぬ。ないのが本當で、あれば不思議だと思ふ。無論、何事の研究も、學と術との二方面から、つまり抽象と具體の二方面から行かなければならぬことは言ふ迄もない。しかし、學的論理的の研究は、研究しただけみんな身につくものではない。一冊の書物を讀んで、三年も過ぎると、その中のほんの一頁か半頁にかいてあつたことだけしか、頭に残らないものである。それだけでも残るのはまだいゝので、残らないのが普通である。つまり一冊讀んだからといつて、一冊分がみんな身につくのではなくて、心の芯へ溶け込む分といつては、只一頁の紙面に盛られてゐる感激だけである。人の心といふものは、そのやうに我が心には取入れられないものである。讀んで何時までも残つてゐるといふのも、人の心を我が心に入れたのではなく、本當は我が心で平生さう思ひ、さう感じてゐたことを、自分よりは優れた表現形式で人が言つてくれたことだつたから、我が心に残つたのである。自分の性格、自分の個性が、平生感じ思つてゐたことと、他の性格、他の個性が感じ思つてゐたことと、偶々部分的に一致したからこ

そ、それが我が心に溶け込んだのである。他人の意見といふものは、矢張り最後まで他人のもので自分のものではない。聞いた時または讀んだ時、その當時は非常に感動させられたにしても、我が心と一致しないことは、時間の経過と共に、何時の間にか我が心から離れて行つて終ふ。そこが我が心の尊さ、我もまた人間である尊さである。しかし、我が心から生れ出て來たことは、何時まで経つても、我とは離れて行かない。常にその心が中心になつて、朝から晩までのどんな些細な言動をも、我が言葉らしく、我が行爲らしく、決めて行く。御飯の食べ方、煙草の吸ひ方、髪結び方、着物の着方、戀の仕方、思索の仕方、下駄のひきすり方まで、その人特有の色になつて出る。それがその人々だけの術であり、能なのである。凡そ人間の生活に、その人の持つ知識だけで間のつんで行く抽象生活といふものは一つもない。知識だけを丸出しに使つても、それは生活にはならない。我が心の中の我が智慧が中心になつて、一々の具體的言動を決めた結果の表現が、生活となるのである。生活は智慧の仕事ではなく、術の仕事、能の仕事である。理論的にやつた研究が、ほんの僅かだけ我が心に残つたなら、残つたその分は智

慧として我が心の一隅に残るのではなく、能となり術となつて我が身についたのである。だから、どんな仕事をするにも、その仕事を裁く力は、我が能と我が術つまり我の地金より他にはない。能の磨けてゐない人は、言ふことと行ふことに一致點がない。理論と行爲とが離れ離れになつて出る。人が、綴方の指導は机上添削をするに限るといふ。自分もやつてみる。ところが、自分は大勢の子供の綴方を預り、それを一々讀通すのがどうも苦痛でならなく、人のやうに甘くやれないとする。その人はそれをする能を持つてゐないからである。理論はどうあらうとも、自分の能の承知しないことを、無理にやつても伸びはしない。その人は机上添削は出来なくとも、綴方指導について、自分の能に合つた、愉快なやり方を他に持つてゐる人なのだ。最初からその愉快なやり方に出會はさないにしても、能を持つた人間である以上、工夫の結果何時かきつとその方法に出會ふことが出来るのだ。人の生活はさうして決つて行く。理論が出来ても、その日その日の仕事に光のない人は、成長の出来ない人である。何時まで経つても身の尊さの出ない人である。但し今の教育界に、その傾向の人が實に多いのではあるまいか。多

いことが事實だとするなら、今迄の教育界は、只、主義、式の教育の研究にばかり浮身をやつすことにあくせくとして、我が能我が術から出る我だけの教育精神を眺めることを忘れてゐた結果としなければならぬ。教育が主義の流行通りに甘く行くものなら、教師といふ仕事は、世の中のどの仕事よりも屑な屑な仕事だとしなければならぬ。畠の片隅に生きてゐる雑草でさへ、花は決して一樣普遍に咲きはしない。

そこで、子供の思想感情が、近頃のやうにかう個性的になつて來ると、教師の方でも、その子その場合に應じた、一々具體的な相談に乗つてやり、指導してやらなければならなくなる。つまり主義や式から割出した一般論では行かないことになる。さうなつて教育は愈々本物になり出すのだが、教師はうか／＼してゐられないことになる。自分の持つてゐる個性を伸ばし、奥行を深め、自分らしい香と光をもつたものに、この自分を育て、行かねばならないことになる。今の教師の中には、子供から質問された場合に、どんな場合にもテキハキと答へるやうになりたいとあせる人がある。またさういふ人を豪い教師だと持囃す人々もある、

どれ程等き集めの利く頭を持つた人であつても、地理のことにも歴史のことにも修身のことにも、一々テキハキとした答の出されるやうな人はない筈だ。青森は本州の東北端にある都會で、徳川家康は豊臣秀吉の後釜に据つたづるい男で、分數の式題に於ては乗除は先で加減は後で位の常識なら、それは誰でも答へ得る。血も肉もついてゐない只の常識だけのことなら。しかし、青森をも知り、豊臣秀吉をも知り、分數式題をも知るといふことは、人の一生を通じても出来ないことである。人間の能といふものは、そんなに自由な融通の利くものでもない。青森のことを問はれて知らないにしても、秀吉が天下を平定し、聚樂第を建て、その宏壯な建築物の内部を飾るに、永徳の屏風をもつてしたことを知つてゐる人なら、教育者として立派な仕事の出来る人である。畫家の永徳は與へられた大きな繪布、金の屏風を見つめて、心の中にどんな夢を見たか。さうしてどんなものを描き、秀吉の心にそれがどう映つたか。その繪はその時代の象徴として、どれ程尊いものであつたか。今も尙桃山藝術として残る永徳の屏風の數々が、そも／＼永徳一人の魂の生存を語るものであらうか。(恐らく、秀吉なくして永徳は生れなかつた

であらう。)永徳の屏風の尊さを知つて、武人秀吉の面影を偲ぶ。それが則ち血と肉のついた、常識でない秀吉の知り方である。常識でない秀吉を知つてゐる位の人なら、青森は知らなくとも、知らない青森へ子供を修學旅行に連れていつて、青森を知つてゐると平生自慢してゐた人よりは、もつと立派に青森の生命的な香を、子供達にかゝせて歸つて来る人である。教育の仕事はそこに至つて生きる。効果を擧げ得るも得ないも、その違ひである。自分に解らない質問をかけられた場合、解らないと明瞭に言へる人は尊い。言つて恥しく思はない人は更に尊い。さういふ人こそ、他に深いものを持つてゐる人だ。他に深いものを持つ人は、道は狭くても、廣い社會を凡て有意義に裁いて行く。誤りがあるにしても、無意義には裁かない人である。

【八】これからの教師

そのやうにして、これからの教師は、常識を乗越えた人でなければならぬ。こんな所で、ぶいと戀愛至上論の例など擧げると、少し變な氣がするが、戀愛至上といふ言葉は、一時人々から随分攻撃された言葉だから一寸言つてみる。戀愛至上といふと、人はすぐ戀愛だ

けのことだと思つて終ふから攻撃したくなるのだ。しかし、戀愛を至上と心得、そこに心を集める位の人は、不貞腐つた不行儀などしないのは勿論のこと、愛人を心から愛することの出来る心の純潔さを持つてゐる。その誠意と純潔さを持つ人は、他人の生命をもきつと愛し得る。花を愛し空を賞でることの出来る美しい心の人である。さういふ人こそ、恐らく他人に對して迷惑をかけるやうな行爲はしないだらう。若ししたとしたなら、それはよく／＼困つた結果、已むを得ずにしたことであらう。それをするには、その人自身、普通人の想像もつかない苦しみで悩み悩んだことであらう。従つて行爲の上には十分な反省を持つことであらう。我々はそのを見なければならぬ。綴方の研究といへば、教育の仕事の只の一部分だけのことのやうに思はれるから、間違つて來るのである。思ふ人の心が浅いのである。綴方を勉強し、文を學ぶ者の心を思ひたい。その仕事の、心の奥行を思ひたい。綴方といへば綴方科だけを思ひ、歴史といへば歴史科だけのことを思つて、それでことの済んだのは、今迄の教師である。八百屋教師とはそれをいふ。心に自信を持たない脅えた顔の教師である。今は早や、さういふ教師人相の

没落期に這入つてゐる。新人よ、若き教育者よ。あなた達の幸福はこれからである。

【九】綴方の仕事

教育の仕事が、さうしてだんだん本物になり、足が地に着いて來初めたにつれて、今後目に見えて變るであらう教科は何だらうかと考へてみる。指導方法のことは別として、内容的に一番影響を受けることの少いのは、算術に理科である。算術理科は、その研究の對象は人間でない。人間に交渉することはしても、關係が直接でない。人間以外の物的法則が研究の對象となるのだから、人間の思想が變り、その生活様式に變化が來るにしても、算術では矢張り三に二を加した結果が五になるに決つてゐる。人間の表情が時代的に變つても、理科の材料となる各種の花まで、時代に應じて色を變へ形を變へることはない。それ等の教科は、安閑として法則的に納まつて居られる。それにして、研究の對象を直接人間に持つ教科、綴方、讀方、修身の類は、時代の影響を受けることが最も甚い。ところが、讀方や修身には教科書がある。教科書とは、國家が示した教育内容の標準に過ぎない。しかし、別に法律でもつてその

使用法を、教育者に命令してゐる以上、今の國定讀本や修身書のやうに、二十年も三十年も社會から遅れたやうなものであるにしても、取扱ふ場合には、當然自代遅れなものとして、正しい批判は加へてゆくにしても、全く顧ないといふわけには行かない。従つて、仕事が廻りくどくなる。それだけ面倒が増す。この場合何の邪魔物もなく、裸の姿で、直に人間同志が觸れ合ふものといへば綴方である。教科の中で綴方ほど、生な人間を、そのまま材料にしてゐるものは他にない。綴方の材料こそ、今、目の前で血の通つてゐる生々しい人間なのだ。雲や霞をへだてて人間を見るのではなく、今、目の前で泣いてゐる、笑つてゐる、怒つてゐる、人間の、その地上の存在を直に見て行くのだ。無論人間以外に、自然物自然現象をも材料とする。しかし理科の目のやうに、その中の科學的法則ばかりを見るのではない。綴方のは、論理的法則を乗越えた、血と肉をもつた法則、つまり眞理を感じて行くのである。見ると感じるには、別な心の動きを豫想しなければならぬ。中には、理科や修身で教へたことを材料にして、それで文を作らせ、それをも綴方だといふ人もないことはない。だが、そんなものは綴方ではない。それ

は文章の形をとつた筆記である。概念の整理であつて、生命の創造を意味しない。綴方とは、作者その子供だけの思想感情の表現で、二人またはそれ以上の者が、同じ内容をと、かくの形で列べて行けるやうな材料では、全然ないのである。綴方が時代の反映を受けることの最も甚い原因はそこにある。

綴方に次いで、時代の反映を強く受ける教科は、圖畫と手工である。子供の心の立て方が變るにつれて、その生活表現の形の上に變化が來るのは當然である。心に變動のない間は、設計圖のやうな家を描き、電車をかいて、それで満足してゐたにしても、だんだんにそれでは満足しなくなる。今まで、櫻の花の色も赤、日の丸の色も赤、先生が採點の時に使ふインクの色も赤、さう感じて満足してゐた子供が、それでは自分の色彩觀念が承知しないことに、だんだんに氣がついて行き出す。といつた調子に、とにかくにも變つてゆく。近頃の教育界の傾向を見ても、さういふことは誰にも肯かれる筈の事實である。しかし、圖畫や手工は、ゆくゆくは綴方と姉妹の關係を結んで、仲よい道連れになつて行くものではあるが、お互に別な入口を持つてゐる。圖畫や手工では、初めから直に人間に觸れて

行くことが少い。綴方の入口とは別である。

ここに於て、私は綴方の過去を思ひ、未來を思ふ。今後、どの教科よりも、最も急激な進歩を見せ、どの教科よりも高い位置を占め、どの教科よりも底深く、どの教科よりも真剣な進み方を見せるものは、恐らく綴方において他にはあるまい。過去の綴方は、國語科の内の一科として、二十年來殆ど原野を迷つて來た。綴方はさういふ部分的な、薄弱な教科ではない筈だ。只時代が進まず、教育界が眠つてゐたからである。修身は子供の道德思想を指導する教科であるといふ。修身の仕事は尊いといふ。それは嘘である。今の修身は、子供の道德思想を規範的に類別することよりしてゐない。まづ徳目を列べ、その徳目に甘く當てはまりさうな人物を持出し、それを仲介者として、子供の心に徳目の注入をする。それによつて、子供自身の爲を反省させようといふのだが、虫のよい計畫であると思ふ。教育者なら、指導者なら、何故歸納的に進まないのか。徳目をまづ示して、その型に子供の心を當てはめて行くといふ演繹法で、教育が出來、指導が出來るなど思ふのは、餘りに人のよい考へ方である。現在今、子供各々が心の中に持つ

てゐる、その思想感情を材料にして、それをだん／＼に磨き、それをより聖く、より美しいものに仕立て、行かうとするのでなければ、實踐道德も倫理思想も進みはしない。今の修身にも、偶發事項などいふ言葉があつて、子供達の日常生活の中から材料をとるやうにと氣をつけてゐることはある。しかしそれは、無垢な白紙の態度で、子供の姿を眺めて行かうといふのではなくて、教育の内容となつてゐる徳目にあてはめ、或る行爲は賞め、或る行爲は排斥して行かうとする、計畫的意図から出てゐるものである。只、例を手近なところにとるといふだけの話で、根本の立て方には少しも變りがない。さういふ企ては、全く無意義な一人よがりである。綴方の内容は、それ等修身の内容と、歩み方が全然違ふ。修身の歩み方は、全然演繹的であるに反して、綴方は全然歸納的である。綴方も今迄のは全く演繹的であつた。文例を示してそれに倣はせ、形式を示してそれによらせ、題を課してそれに内容を埋めさせるなど、全く演繹的法則的であつた。綴方が人間精神を育てる最高の手段である等、思つてもくれなかつたことだつた。思ふ人はあつても、時代が承知してくれなかつた。さういふことを考へたり思つたりす

る教師は、頭から不良とされて終つたのだ。しかし、それは全く浅薄な思想から出た侮辱であつた。綴方の仕事は如何に高く貴いものであるかと、今、やつと人々に氣づかれ出して來た。教育界は、だんだんに鋒先を立て直す。教育の仕事も、日に日に、胡魔化しの利かない、眞剣なものになつて行くことと思ふ。さうならなくては、第一子供の心が承知しない時代へと、今、直面したのである。希望の多い前途が開けて來たものだと思ふと、愉快的氣持がする。

第二講 教室の氣分

【一】私と子供達

今年の三月に卒業していつた五十二人の私の子供達は、六年間を私と一緒に連れて来た、関係深い子供達である。最初に預つたのは、二十人きりの一年生だつた。一年生の二十人は、私の手にはまだ多少無理だつた。十五人か、十七八人位のところが、一人の教師の手一杯ではあるまいかと思ふ。さて、そのうちに、子供達はだんだん共同生活に慣れ、自分で自分の仕事を見出すことが上手になつて来た。従つて、それ程私の手がかからなくなつて来た。三人増し、五人増し、十人増しながら、私は二年三年四年を迎へた。私は、算術や理科の仕事には自信がなく、圖畫や手工や音楽や體操にも、それを引受けてやつてみる程の覚えが腕になかつた。子供の仕事がだんだん進んで来るにつれて、それ等の仕事は、それぞれ別な専門家に頼むことにして、私は、私に出来ることだけをやつた。それでも一日四時間は、子供達に喰つてゐることになつた。

さうして、私達は六年目にかゝつた。その年の冬だつた。私は病氣をして、或日、教室で腦貧血を起した。翌る日もまた倒れた。學校に出るのは危険だと、醫

者が言つた。用心しなければいけないと、友人が注意した。自分もさうだと思つた。しかし、私は學校に出て、子供達と一緒にゐることに、少しも不安を感じなかつた。寝込まねばならない程悪げはだが、學校に出て、子供達の中でまた卒倒することがあつても、心配はいらぬ氣がしてゐた。子供達は、その私をどうかするだらうと思へた。冷い床板の上に、長いこと私を放つて置くやうなことはしないだらうし、私が倒れたからといつて、他の教室にまで迷惑をかけるやうな大騒ぎを始めて、まさかうるたへ廻るやうなことをも、しないやうな氣がしてゐた。彼女達は、適當に醫者を呼び、私を靜養室にかつき込んで、私の目の覺める迄、かはりばんこに、靜かに守をしてゐてくれると思つた。家にゐて、貧血が來ないか來ないかと、氣を病んでゐるより、學校に出て彼女達と仕事をしながら、不意に倒れて、さうして貰ふ方が、樂でありさうな氣がしてゐたのだ。

私は、愈々寝こまねばならなくなるまで、學校に出た。その時私は、平生自分が心の中で、どれだけにまで子供達を信頼してゐたかと、はつきり分つた氣がして、ひとりでに涙ぐめて来た。日々のうちにはうるさいこともあり、不愉快なこ

ともあり、可愛いは可愛いにしても、そのことだけを取立て、人に吹聴してみたい程のこともない。しかし、顧ると、實際私はそれ程迄に、子供達を信頼してゐたのだつた。

私は長い間教師をして來たが、師弟愛といふ言葉には、かなりの疑を持つてゐた。他人の子供を大勢預り、平等に、而も芯から可愛がるやうなことは、出來ぬことだと思つてゐた。事實そんな氣持にもならなかつた。芯から可愛いと思ふ子供もゐたし、何とも感の起らない子供もゐた。嫌ひな子供さへあつた。或る頃にはまた、日々の仕事を、まるで勤め心でしてゐるやうな氣がして、子供がうるさくてならないこともあつた。しかし、今年卒業させた子供達こそは、預つたその日から胸に應へて、我子だといふ氣が強くした。私の心の中に、新しい試みに向はうとする希望が燃えてゐたこともある。子供達の人數が、自分の希望通り二十人きりであつたこともある。これから六年の間、他人の手に渡すのではなく、自分一人で育てるのだといつたうれしさもあつた。とにかく、今度こそは我子だと思つた。これでもまだ幻滅を感じるやうなら、喰ふに困つても、教師はせぬとま

で思つた。それ程の意氣込みで私は仕事にかゝることが出來たのだつた。今でこそ、合科學習といふ言葉が、教育界に相當知れて來た。その合科といふ仕事が日本に初めて誕生したのは、今から七年前で、私の教室がそもその産屋だつたやうに覺えてゐる。そんなことはどうでもよいことだが、一口に言へば、教科書なし時間割なしの仕事で、教室は明るい子供部屋、私は子供達のみき友達よき母といふのが、私の心得だつた。無論、かういふ仕事は、私の學校だからこそ容易に許されるので、今の教育法規によると、普通の學校ではまだ許されぬことになつてゐる。この點、普通の學校でやるとしたなら、監督者との理解を得て置く用意が、十分でなければならぬと思ふ。それからの六年間は、恐らく私の心の芯にまで愛の届いた、教育生活の愉快時代だつた。

【三】教室は明るい子供部屋

教壇に立つこと、鞭を用ふこと、大きな聲で講話すること、この三つを捨てた生活から、私はまづ伸びりとした落着きを感じ出した。我こそは教育者だ、この子供達をどうでも、かう教育しなければならぬと思ふ、野暮な意氣込みが、私の心からとれて

来た。粘土を材料にして仕事してゐる子供もあれば、讀物にふけつてゐる子供もあり、教室の外に出て、大工をやつてゐる子供もあり、文をかき、繪をかくてゐる子供もある。仕事には時間の制限がないのだから、疲れたなら一人で勝手に休む。仕事のよい切れ目には、皆一緒に外に出て、遊戯をしたり歌つたりする。子供の多い家の、日常の家庭生活と大した差はなかつた。

【三】學説をぬきにした教育

私のこの仕事は、別に教育學の原理から割り出したものではない。また、學説的に自分の思想

をまづ系統立てゝから、かゝつたものでもない。只、或る材料を、教師の方で調べて、それを傳へて、それによつて子供の心を育てゝ行かうとする演繹的な教育に、愛の幻滅を感じてゐた私は、今度はまるつきり反對な立場に立つて、一切を子供から引出し、出て来た一々の具體について、それを育て仕立てゝ行かうといふ、歸納法をとつてみただけのことである。理論といふのは、只それだけのことである。それをするには、最初から大勢の子供を引受けられさうになかつたからまづ二十人位といふ見當をつけただけのことである。

【四】着物と鳥と花

さて、かうして始つた私達の生活が、三ヶ月五ヶ月と進んで行くにつれて、私は自分のつけてゐる袴が、何だか氣に

なり出した。袴をつけた自分の姿が、その生活とびつたりしないやうに思はれ出した。私は、帯を締め、品のよい羽織を着て、子供達と一緒に暮したくなつて来た。今、私を知つてゐる人の中に、私を、見かけによらないおしやれだといひ、着道樂だといふ人がある。懐の中のもの知れてゐるのだから、着物に道樂をする程の餘裕は、勿論持たない。しかし、人がさう言ふと、それ程のことはない筈も、それに近い感が自分にもする。かういつた氣持が、私の中に何時頃から芽生えたのか。それは丁度今から七年前頃からである。つまり彼等との生活をはじめた頃からである。初めのうち、子供が私に話しかけて来て、話に實が入ると、ふつと「ねえ、お父ちゃん」とか、「ええ、お父ちゃん」とかと、言つたりした。さうしては慌てゝ「あゝ先生だつた」とか、「ねえ、お父ちゃん」と言つて私の顔を見上げ、「あゝお母ちゃん」と、うつかり言變へたりした。男性的な私への親しみが、とにかくさう言つた感を、子供達に持たせてゐたらしかつた。お父ちゃんと

呼ばれても、お母ちゃんと呼ばれても、私はまごつかずに「はア」とか「うん」とか、その場合にふさはしい言葉で、答へられたから、妙だつた。

私は以前から子供は好きな方だつた。が、さうなり出してから、急にその心が進み出した気がした。勤めの立場から、袴を外し、帯を締めて出ることは、遂に出来なかつた。しかし、子供達のよい友達であり、よい母であるらしい。身だしなみには、不思議と不注意ではゐられなかつた。それ迄の私は、誰の目にも肯かれる程の無頓着者だつた。その頃、人はよく私を無頓着者、かまはず屋としてゐた。教育學や心理學に没頭し、その中から論理的に愛を求めてゐた頃だつた。心固く閉して開かず、教育の師弟愛に幻滅を感じてゐた頃だつた。苛々として落着かず、先へ先へとあせつた頃だつた。

その私が、今度の子供達と一緒に暮し出してから、着道樂といはれるところまで、しやれ出した。どう見ても教師らしい野暮な風采が、自分の目について来た。けばけばしないで、品がよくて、柔か味のある地質と色合が、しきりと私の目を引き出した。地味に見えて、性のよい品物が、私の越味を誘ひ出した。私は、自

分の感情が、だんだんに和やかになつて行くことを感じて、うれしかつた。私はぼつぼつ、繪を見て喜び、音楽を聞いて感謝するやうになつて来た。自分の家中、書齋などの裝飾にも目がつき出した。子供達と一緒に、教室でセキセイや十姉妹やカナリヤなどを飼ひ、窓外に鳩を養ひ、花作りを始めたり仕出した。一緒にピクニックに出かける時には、お辨當やお菓子の用意が、何となく楽しかつた。私の子供達は、今年の三月きりで、私から離れて、女學校へ進んだ。學校の歸り彼女達は、立ち代り入れ代つて、私を訪ねて来る。その時、約束でもしておいたやうに、彼女達自身、園藝で作つた花を、拂下げてもらつて、持つて来てくれる。四月の頃にはシネラリヤ、チュウリップ。六月の頃には薔薇。さうして六月から七月へかけて、ダリヤの花束。私と彼女達とは、遂にさういふ因縁に結びついて終つたのである。六年間、私達はよく一緒に公園に出かけた。私が私の小説を、社會に發表し始めたのも、その間のことであつた。

【五】教室の母の實感

私は彼女達と一緒に暮し始めて、初めて、落ちつく所に落ちついた気がした。彼女達の聲によつて、初めて

呼び覺された氣がした。

私は、子供達の卒業と同時に、學校を退いて終つた。いよくその子供達と別れて終つた後の、自分を思ふと、淋しい氣がして、一人學校に残つて居られなかつた。六年もかゝつて育て上げた子供達と別れて、すぐにまた、別な子供と縁を結ぶやうな、氣持にはなれなかつた。改めてもう一度、別な子供の世話をしてみる氣になるまでには、とにかく一二年、今の熱を冷してからでなければ、出来さうになかつた。退めた方がうれしいか、學校に残つてゐた方がうれしいかと、子供達の心を聞いてもみた。退めても困らないなら、退めてくれた方がうれしいと多數の子供が答へた。いかにもと思つた。長いこと自分達を可愛がつてゐてくれた先生が、別な子供と暮し出した姿を見ることは、子供心にもうれしいことではなかつたに違ひない。私は迷はずに、一先づ學校を退めた。長いこと頼つてゐた背景を捨てることは、外目からみて勿體ないことにも見え、馬鹿なことにも見え、淋しいことにも見えたに違ひない。私の心を知つてゐてくれる同僚達は別として、何にも知らない郷里の姉達は、随分惜しがつて、私に忠告したりした。しかし、

私はそれで満足してゐた。卒業式に出て、私はむせび泣いた。その日、遠くにゐる友人知人から祝電を受取つたことが、私の心を何と感傷的にしたことか。教師になつてから、これ程感激したことは、恐らく初めてだつた、子供達と別れた當時は、ぼんやりとしてゐた。二月ばかりは一枚の原稿も書けず、一冊の書物も落ちついて讀めなかつた。二三年遊ぶ間に、小説の方も勉強し、教育のことにも精進しようと思つながら、何とぼんやりした私の心だつたらう。しかし、私はこれで母らしい資格が、いくら出来た氣がしてうれしかつた。子供達によつて、母らしいものにして貰つた氣がして、有難いことに思つた。

【六】思ひ出

今、さうした過去六年間の生活を振り返つてみて、私の心の中には算術の仕事のことにも、地理の仕事のことにも、思出してなつかしいものが、一つも残つてゐない。それ等の仕事も、やることはやつたのだが、私の心と子供の心を結んだ橋渡しにはなつてゐない。只もう、子供達の綴方のことだけが、なつかしい記憶となつて眞先に出てくる。綴方といふ玉を持上げると讀本といふ玉、修身といふ玉、歴史といふ玉が珠數のやうに、續いて引出されて

くる。その後にごちや／＼と、まだ何か續いてゐるやうだが、之れが算術なのか、地理なのか、とにかく、ごちや／＼見えるだけである。若し私に、圖書、手工、音楽の中の、どれか一つだけでも、引受けてみるだけの自信があつたなら、今の思出が、どれほど懐しみを深めてゐるかも知れない。その能を持たない自分が恨まれる。

【七】強ひずに生れた綴方

一二年の幼なかつた頃には、子供達は綴方を繪で表現し、手工（主に粘土）で表現した。三四年生

の頃には、盛んに言葉（話し方）で表現した。子供達の繪物語や粘土物語を見て私がうれしがつてゐる間に、子供達はだん／＼に話上手になつていつた。彼等は私によい話をして聞かせた。私もよい話をして、彼等に聞かせた。子供達は、むさぼるやうにしに、歴史物語を読み、童話を讀んだ。さうして五六年生に進み、子供達は文字をもつて表現する、純粹の綴方に興味を持ち出した。

綴方を作らせようと強ひたことはない。自然にさうなつて來ただけである。だん／＼に、子供達の思想感情が豊かになり、文字が自由に書けるやうになり、さ

うして、綴方といふ一つの形が、自然に産れて來たのである。強ひなかつただけに、自然に出て來た芽の成長は、實に素直で速かだつた。これから後、なるべく多く子供の綴方を出し、それ等について、私の経験を話すことにする。とにかく、讀んでみてやつてほしい。讀んでみて下さつたら、私がくどく／＼言はなくとも、一切のことが明瞭に解つて終ふ。よいのもあらうし、悪いのもあらう。但しそれ等の中に、何か子供らしい、素直さと、純眞さを認めて下さるなら、私はどれ程うれしがることであらう。

【八】子供達への感謝

私は今、子供達に感謝してゐる。眞面目に感謝してゐる。脅えず恐れず、繪物語や粘土物語にして見せ、よい話にして聞かせ、文に綴つて見せてくれた、その開けつ放しな心に、心から感謝してゐる。私は、子供達からいろいろな心を見せて貰つた。いろいろ美しい彼等の心の持物を見せて貰つた。修身でも地理でも、見ることの出來なかつたものを、綴方で見せて貰つた。私は母にして貰つた。さうして私は、母には母の修身があり、母には母の歴史や地理があることを、だん／＼に悟らせて貰つた。私

の夢は、子供達の美しい世界の想像の中に遊ぶ。私は矢張り幸福者だといふ氣がする。

第三講 子供の氣品

【一】母の心と教師の心

五十二人の私の子供が、五十二人とも女学校へ進みたいと志願した。揃ひも揃つて、同じ附屬の高等女

学校へ志願してくれた。附屬高女は二つとも、關西では一流どころと言へよう。毎年募集人数の五倍七倍の志願者がある。二校の募集人数を合せて百三十名しかないところへ、五十二人も突出して頑張つてみたところが、それがどうにもならないことは、見え透いてゐる。それでも彼女達の希望はさうだつた。勿論、いづれさうなるだらうことは前から解つてゐた。

が、一人の教師が、どの位の人數にまで殖しても、無理なしに世話が出来るかを試してみたい興味から、私は人数を殖して來た。だから、愈々さうと決つた時には、私も一寸突當つた感じがした。どの子供の顔を眺めても、今後女學生になる資格を持たないやうなのは、一人もない。白痴があるわけでもないし、共同生活に参加出来ない程の不具者があるわけでもない。しかし、何といつても、生活内容を智力標準に組織してゐる、今の女学校へ送るには、また別な標準で、子供達の選り分けをしなければならぬ。私は溜息をついた。その時のことは、前に出

した子供の作品「推薦」で、大體解つてもらへると思ふ。まあ大體あれ位の騒ぎで、私達はその山を越えたのだつた。遂に四人の不合格者は出したが、他の四十八名は、とにかくにも入學を許された。子供達は随分喜んで、はしやぎ廻つた。その日は、私もやれ〜と思ひ、胸を撫でた。しかし、芯からは喜べなかつた。うれしいのだが、何だか恐しかつた。皆が皆まで、この先甘くやつてくれようとは思はれなかつた。正式な試験はなかつたにしても、日常の私達の生活をよく調べ抜き、その上に職員會議にまでかけて、事の決つたわけなのだから、先が悪くても私の知つたことではない筈である。しかし、そんな氣にはなつて居られなかつた。

【二】個性は働く

愈々入學して終つた後、私は時々その先生方に、自分の子供達の様子を聞いた。私は、子供達の勞力のことばかりを氣にしてゐた。私は己惚れから、六年間を押し切ることは押切つたが、さてその子供達が、女学校の生活について行けないのでは困ると思つた。一學期の終りが近づいた。その時私は、大體ついて行つてゐるといふこと、子供達はみんな快活で、

談話上手に慣れてゐる故もあるが、とにかく人觸りが柔かく穏かだといふこと、附屬小學校から来る子供には、年々どうもそのことを鼻にかける癖があるが、今年のはそのことが目にたゞないので、一般に氣受けがよい、といふ話をきいた。私は満足した。缺點の方は、向ふの慎しみから言はないのだ。いゝことだけを私に聞かせてくれたのである。さう思ひながら、私はうれしさから涙ぐんだ。これでは女學校の目も、まんざら間違つてはゐないなどと、已惚れたことに感激したりした。

その中に終業式の日が来て、子供達は「成績通知簿」を貰つて來た。過去の生活に、さういふものを貰つたことのない子供達は、平生、その「通知簿」のことを、随分氣に病んでゐた。その日歸りがけ、それを見せに、彼女達は私の家を訪ねて來た。その日は朝から、私もそれを豫期して心待ちにしてゐた。すつと一通り見て、私はほつとした。どの學科も揃つて優れてゐる子供といつては、まづ三人位しかなかつた。しかし、育てた個性は、矢張り働くと思つた。修身や地理では認められてゐない子供でも、體操や園藝で認められてゐた。體操や園藝の拙い

子供でも、作文や講讀で優れた力を出してゐた。平均してみると、多少の差はあつても、甚く見劣りのする子供はゐなかつた。個性は、どの道からか、それ／＼一人前の能を見せる。私は矢張りうれしかつた。この先どうなつてゆくか知らないが、とにかくにも、それで自分のして來た仕事に、多少でも安心してよい一段落がついた氣がした。

【三】倦きの來ない子供

私は平生、豊かな福よかな子供を育てたいと、心掛けて來た。どうかして、意地悪る者や、すね者にならないやうにと願つた。眞直ぐで明るい、そんな感を持たせたいと思つた。凡ての教科に満點をとるやうな子供も稀だが、何か病理的な缺陷を持つた子供でない限り、十三四科目もある教科中の、どれにも力の出せない子供はない筈だと思つた。一寸した手掛りでもよい。目には見えないやうな草の芽でも、土と熱とに恵まれさへすれば、きつと大きく育つ。一寸した手掛りでも、穏やかな境遇に育ちさへすれば、きつと眞直ぐ、豊かに育つ。自分は、そのための母でありたいと思つた。とにかく、交際つて交際倦きのしない、見て見倦きのしない子供を育てた

いと思つた。學問が優れてゐても、酢の利きすぎたさかしい子供は、交際倦きがする。それかといつて、おとなし過ぎて、どんな場合にも只「へい、へい」言つてゐるやうな、頼りない子供でも、交際は永續させぬ。勘定高いのも恐しい。意地悪くひねくれたのは、尙恐しい。理屈つばい勝氣者には、肩が凝る。さういふ性向は、生れつきではあつても、性格の決定は、生後の生活習慣から來るとしなればならぬ。見て見倦きのする、交際つて交際倦きのするやうな厭なことに、興味を持たせたりするのは、皆が皆まで、育てる者の責任だと思ふ。穩かな心の中に、何かの芽の、日に日に伸びる子供は、今日の交際には今日の新鮮さがあり、明日には明日の熱があり、明後日には明後日の深刻さがある。庭の草が、まづ芽を出し、草を茂らし、蕾をつけ、花を咲かせ、實を結び、さては葉を落して、冬籠りに入る。その姿を眺めてゐると同じ希望を、子供の上に感じたい。見れども倦きの來ない、楽しい姿である。調和よく豊かに伸びる姿には、醜い影が少しもない。それは美しく、生々しい。その姿を見て、愉快と幸福とを感じない人があるまい。互が互に愉快を感じさせ、幸福を感じさせる交際は、蕾のやうな奥ゆ

かしさと、熱を持つて、永久に續く。伸びる美しさを持たない者は、生れながらにどれ程美しい外面的容姿を持つてゐても、人に芯からの幸福を感じさせる生きた魅力が備らない。單なる美人は多く薄命である。人生の平和と幸福は、交際つて交際倦きのしない、その性格者によつてのみ續けられる。彼女達を育てながらも、私の心は何時も、社會的によき仕事の出来る、明るい感の、若い新妻の姿を想像に描いてゐた。今のモダンでは眞平だと思ふ。頭の固い今の職業婦人型も困り者だと思ふ。心の調和を失はずに育つた者だけは、職人になつても女房になつても、女中になつても、その場合場合を、すねずに切り抜ける裁きのよさを持つたらうと思ふ。私はさう信じてゐる。

【四】教師の氣品と綴方

教師の心は、すぐ子供に移る。意地の悪い教師は、子供の意地の悪い仕事に、すぐ興味を持つ。勘定高い教師は、勘定高い話が出ると、すぐ乘氣になる。理屈つばい教師は、その場が理屈つばくならぬと、興醒めた顔をする。口ではそれ等のことを奨励してはゐないのだが、互の心が不知不識の間に通じて、結果が氣分的にさう向いて行く。教

師自らの省察と精進が、教育上どれ程大事なことか。

私は非常に氣の早い性質を持つてゐる。ぐずぐずしたことが嫌ひで、自分の心に決めたことは、どうしてもすぐ實行に移してみないと、氣に入らぬ癖を持つてゐる。若い頃には、そのことでよく失敗した。ところが、子供との交際が、だんだん深くなつてくるにつれて、その缺點が、非常によく自分の目につき始めた。生活が落ちつく、それだけ心にゆとりが出来るのだと思ふ。自分の家を、遠くの方から眺めてみるやうな態度で、自分の心を、主観にとらはれずに眺めることが出来るやうになつた。客觀的に眺めてみると、自分の缺點がよく解る。その態度の出来ない間は、人から一寸した缺點を指さされても腹が立つた。自分を客觀視する落ちつきが出て来ると、腹が立たずに苦笑が出る。そして、その缺點が作り出してゐる、日常のいろいろな場面が、頭の中に出て来て、可笑しくなつたり、冷汗が出たりする。詫びしい氣持にもなる。人を憎めなくなる。美しい姿を愛し、醜い姿を憎む力が増してくる。

一體に文章は、その時その時の、自分の情熱を盛る器である。だから、或る期

間が経ち、熱が冷めてから、その文章にもう一度當つてみた時、自分自身の姿がよく解る。作品の中の自分を、まるで他人のやうな冷かな目で、眺めることが出来る。割増しもなく割引きもない。正しい批判を、自分の心に下すことが出来る。綴方は人を育て、人は綴方を育つ。苦しみも多いが、これ程愉悅に富んだ仕事は、恐らく他にあるまい。綴方教育こそ、教育中の教育だと思ふ。

第四講 この綴方とこの質感

【一】習慣的な心構へを毀して

今迄の子供は、綴方を習慣から割出して作つた。「死」を材料にして綴方を作る場合には、まづ悲しい、涙ぐましいものに仕上げようと骨折つた。我心の鏡に映つた通りを、正直に見るなら、それ程悲しいことではなかつたにも係はらず、悲しいものにしなれば、「死」といふ感に合はない氣が、習慣的にするのである。そこで、綴方は實感のない形式本位なものになつて終ふ。指導しようにも、指導の仕様のない綴方である。添削は文章の上だけのことで、堀下げようにも堀下げてゆくことの出来ない綴方である。今迄の教師は、それを奨励しないまでも、見逃して來た。それを見逃してゐる間は、綴方は決して進まぬ。教師の心と、子供の心が、びつたりと觸れ合はぬ。教育の仕事の土台が出來ぬ。教師と子供は、何はともあれ、素裸になつて組合ふことの出来る心の用意を、互に持ち合はねばならぬ。次に私の子供の綴方を一二あげてみる。

【二】文例 お祖母さんの死

(六年女兒)

呼び起されて、目をさました。あたりは未だ眞暗で、電燈がぼんやりともつてゐた。お父さんが枕もとで、

「良子。おばあさんが死んだで」

と言つた。私は以外な事に驚いて、

「え、死んだ。ほんまか」

と、目を見張つた。私は起きて、着物を着かけた。二月半ばの夜は寒かつた。ぶる／＼ふるへながら、ちつとお父さんの顔を見てゐた。

「三時半に息が切れたんやけどもな。起してやらうかと思たんやけど、よう眠つてたからな、起さなかつてん。大勢來てくれてるよつてん、一度見て來てやつてんか」

と言はれた。どうせ死ぬとは思つてゐたが、こんなに早くとは思はなかつた。耳をすましてゐると、隣の小母ちゃんやんの聲や、母屋の伯母ちゃんやんの聲にまぎれて、お母さんの悲しさうな聲がきこえた。

「やあ、ほんまやねんな」

と思つて、私は着物を着るなり、下へ走つて降りた。座敷の火鉢の所には、五六人の男の人が並んでゐた。奥のおばあさんの枕もとには、女の人がめい／＼に、お母さんの話を聞いたり、又自分の思ふことなどを言つてゐた。あまり寒かつたので、私は、弟の寝てゐる横へもぐりこんで、首だけ出して、皆の話を聞いてゐた。お母さんが、

「昨夜あたりは、おなか痛も、じつと止んで来たところやのに、これで助かりなかつたと思つたのになあ。こんなに早う死ぬとは」
と言ひながら、袂で涙をぬぐつた。

「そらさうやわな」昨日、あんたうちへ風呂入りに来て、言うてたところやがなあ」

と、母屋の伯母ちゃんがつた。時計が四時を打つた。何時もなら、こんな時分はよく寝てゐるが、今日は、目がさえて、ちつと話を聞いてゐられた。お母さんが、

「昨夜、音松さんと、いちえさんが来てくれたから、二時頃おかゆを食べさし

もつてな、さつき誰来てはつたか知つてるか、と聞いたら、いちえさんと音松さんが来てくれてはんね、と、よう知つてたがな。それから私にな、おかゆ食べたらどうやとか言うてたんやけどもな」

隠居の小母ちゃんが、びつくりしたやうに、

「え、そしたら、氣はたしかなものどしてんな」

「さうどんねが。氣は少しも、ほけてやへんかつてんわ。奥村のやはな。夢中になつて死なはつたけども」

「どんな死に方もあるものどすな」

と、母屋の伯母ちゃんが言つた。

「それから、しばらくしてな、こん／＼とせきをして、たん出たつて言はりましてん。それで、よし／＼て言うてな、紙でごろつと取つてやりましてん。それがあこに入れてある大きなあれでんね。今度又たん出ましてん。そして取つてやりましてんけど、まだついてるて言うてはりましてんが。それからすうと息引取つてんけど」

と、お母さんが涙聲で言った。

「そしたら、たんの来たのが最後だつてんな」

と、母屋の伯母ちゃんがお母さんの顔を見ながら言った。

「さうやね」

と、お母さんは、ため息をついた。

五時六時も過ぎて、やがて七時になった。私は洋服と着かへて、學校へ行つた。課外を休んで、四時の汽車で歸つた。六時頃になると、大勢の人が、提灯に火をつけて、くやみに来て下さつた。隣の小父さんが、一人々に葉書を渡してゐなかつた。七時頃、名古屋から、叔母さんがもどつて来た。大勢の人にあいさつをしてから、すぐお祖母さんの所へ行つた。東京からは、姉さんと和ちゃんが来た。私は和ちやんを抱いてやつた。すい分大きくなつて重かつた。お祖母さんが死んで、皆が悲しがつてゐるのに、亦いほつべたをして笑つて、うま／＼と言つて居た。姉ちゃんも、目に涙をためてゐた。白いさらしの布で、お祖母さんの顔を包んであつたのを、叔母さんが取つた。私は、初めて、お祖母

さんの死顔を見た。三年間も床についてゐなかつただけに、何となくやせて、ほつべたの骨が、つき出てゐた。青い顔をしてゐた。

叔母さんは、いきなり泣いた。お母さんも、それについて泣きながら、今まで話した事をも一度話してゐた。やがて叔母さんが涙聲で、

「此の前來た時に、これだけ世話をしてもろたら、もう死なはつてもかまはへんとは言うてたけどもなあ」と言つた。

「そらさうやわな。こねん長い間世話して、もう十分な事はしてあるから、もう死んでも、満足だと思つてたけどもなあ、死ぬ覺悟はきめてゐても、やつぱり親に死に別れると」

と言つて、お母さんは又涙をふいた。姉さんが、

「此の間から、何となく悪い夢ばかり見てたもの。これではお母さんが悪いのだらう、と思つてゐたけれどもな、歸ろと思つても、和ちやんが風をひいてたので、注射してもらつて、昨日やう／＼濕布をとつただけだから。此の子さへ良か

つたら、もう一度生きた顔を見られたのに」
と言つて、涙をこぼして、ちつと下を見た。私は何となく、お母さん等が可愛
いさうでならなかつた。けれども、泣くほど悲しくはなかつたので、ちつと見て
ゐた。

「虫の知らせあつてんやろでなあ」

と、お母さんが、ため息をついた。叔母さんが、枕もとにあつたお盆の上の、
しきびの葉を、お茶碗の水にひたして、お祖母さんの口の中へ入れた。その時、
口の中から、白い歯が二三本見えた。今、皆泣いたりして、お葬式の用意など
してゐるけれども、お祖母さんが、若し目をあいて、口をきいたら、どうやら
うと思ふと、何となく面白くなつて笑ひ出しさうになつた。が、皆悲しんでゐ
るのに、笑ふ事は出来なかつた。

隣の間で、お母さんをはじめ、大勢の人が、白い蒲團と、白い着物とを縫うて
ゐた。私はまたそんな事を思つた。その晩は、早くから眠つてしまつた。翌朝
も早くから起きて、學校へ行つた。

いよく、葬式の日が来た。私は、笠持にきまつた。奥には花輪や、おまんじ
ゆうなどが、棺桶の左右に、きれいに並べてあつた。殊に花輪が、大へんきれ
いに見えた。和ちゃんはそのを見て、わい／＼よろこんでゐた。いよく、棺桶
に釘を打つと言ふ時に、お父さんが、皆一人づつ、しきびの葉に水をひたして、
口の中へ入れてやるやうにと言つた。私等は棺桶のまはりへ集つた。

ふたを取つて、中の白い布を取ると、お祖母さんが、はつきりと見えた。兩
方の手を組み、じゆうすをかけてゐなかつた。白いものづくめの中に、お祖母さ
んは、白と土色のまじつたやうな顔をしてゐた。何となく心細い氣がした。こ
れで、もう別れるのだと思ふと、今まで、生きてゐなかつた間に、もつとよく
世話をして上げればよかつた。もつとよく言ふ事をきいて上げればよかつたと、
私は思つた。みんなのすゝり泣く聲がした。先づ第一にお母さんから、口に水
を入れなかつた。水を入れながらも、お母さんは泣きながら、

「なあ、極樂へ行きや」

と言つては、又泣いてゐた。其の外に色々、やいこしい事を言つてゐなかつ

だが、泣聲ではつきりした事はわからなかつた。次に名古屋の叔母さんや、奈良の叔母さんも、何か言つてゐなかつたが、はつきりした事はわからなかつた。次から次へと、姉さんも兄さんもすんだが、皆半分泣いてゐた。やがて私のやる番になつた。

お茶碗の中へ水をひたした時、何となく、これが最後だと言ふ氣が強くなった。それから、口の中へ入れようとする、口があかなかつた。今まで御飯を、お母さんが上げてゐなかつた時は、一人で口をあきななかつたのにと思つた。しきびの葉で、無理に口をあけたが、中には冷たさうな、白い齒が、上と下とかつちり合つたままであつた。

次に小さい兄さんがした。口に入れる時、

「極樂へ行きや」

と言つた。其の時私は、私もあれ位の事は、言うておいたらよかつた、と思つた。いよく釘を打ちなかつた。お母さんや叔母さん等は、じつとその中をのぞくやうな様子をして、涙をためた目で、見つめてゐた。そして、又もや聲を

上げて泣いた。

【三】誇張のない孫心

私は子供上りの頃に、「祖父祖母死んだら、孫子の祭だ」といふやうな言葉を、村の人々から聞いたことがあつた。私の生れた頃には、家には祖父母はゐなかつたので、その實感は遂に知らなかつた。が、この子の綴方をよんで、私はそのことを思出した。綴方の終りのところに、

「次に小さい兄さんがした。口に入れる時に、

「極樂へ行きや」

と言つた。その時私は、私もあれ位のこと、言うておいたらよかつた、と思つた」

といふのがある。特別な愛情を持つてゐる場合は別として、あの位のところが、祖母の死に際して感ずる、孫の普通の感なのではあるまいか。私はそんな氣持がして、この所を面白く讀んだ。母親がその姉妹達と、親には添倦きがしないと云つて、泣いてゐる。その様子を見て、

「私は何となく、お母さん等が可愛さうでならなかつた。けれども泣くほどかなしくはなかつたので、じつと見てゐた」

と言つてゐる。全くさうだつたらうといふ氣がする。この子は、頭のいゝ熱情家である。よく腹を立てたり、怒つたりはするが、頭がいゝだけに、感傷的な氣持の少い子供である。この文を読んでも、感情に誇張がなく、無茶苦茶に悲しがつたりしてゐないから、いゝ氣持で讀める。安い涙を誘はれるやうな所がないから、本當に讀めて、不快が残らない。文章としては、言葉がごち／＼と、可なり無駄もあり、始終、場所を掴み忘れてゐて、作品に重みの出ない缺點はあるが、子供のものとしては、よいものだと思ふ。素直で嘘がなく、ところどころに面白い表現もあり、相當力應へのするものである。

【四】文例 泥 棒

(六年女兒)

下水の中が、黒く、音を立てゝ流れてゐた。電燈の光がうつつて、ところどころ黄色に光つて、黒い水がだんだらに見えた。道に敷いてある石が、歩く度

にざくつざくつと音をたてた。向ふに材木屋の瓦斯燈が、ぼうつと光つてゐた。もう直きうちだ。私は小母さんと連れて、ざくつざくつと歩いていった。

「私なんだか足が痛くなつた」

と、私が言ふと、小母さんは、

「もう、私はと、し、より、だけど、なんともないわ」

とおつしやつた。又黙つてうつむいて歩いた。四辻の所まで来た。法蓮の方のあたりが、眞暗な中に、うすく見えた。向ひのうちの人が、大きな聲で、

「おい、あけてくれ」

と、どん／＼戸をたゝいてゐた。小母さんは先にたつて行かれた。家の前まで来ると、戸が少し開いて、中から電燈の光が見えてゐた。私は小母さんに、

「やあ、もう叔母さん歸つてるね」

と言つた。小母さんも、ふしぎさうに、

「えらい早く、歸んなさつたんやな」

と言ひなさつた。小母さんは、戸を開けられた。私はいりかけた。すると小

母さんが、

「やあ、下駄ないわあ」

とおつしやつた。私はびつくりして見ると、下駄はなくて、室の中は、しんとして、何の音もしなかつた。小母さんは、飛ぶやうにして入つて行かれた。私もこはくなつて續いては入つた。

「えらいことした」

と、小母さんは、大きな聲でいつた。私はびつくりして、入つて見ると、押入の中は、全部開いてゐて、叔母さんのゆかたや、私の合羽など、火鉢の所まで、引出して来てあつた。其中で、小母さんが、きよとんととしてゐられた。

私は靴をはいたまゝ、四つばひになつて上つていつた。お座敷は、をかした着物ばかりで、一ばいにひろがつてゐた。私は思はず、

「よう」

と聲を上げた。箆笥を見ると、みんなあけてあつた。叔母さんの行李も、みんなからつぽで、ふたを取つてあつた。

「警察へ行かう」

小母さんが、思ひついたやうに言はれた。

「うん」

と答へて、私は小母さんと一緒に家を出た。外はまつくらで、電燈の光だけが、ぼうつと光つてゐた。誰も通つてゐる人はなかつた。さつきの人が、黒いオーパーのポケットに手をつつこんで、

「あけろ、あけろ」

と言つてゐた。其人は、こつちから何も言はないうちから、

「どうかしましたか」

と聞いた。私は、ぶる／＼ふるへて、しやうがなかつた。小母さんが、

「泥棒は入りました」

と、こはさうにおつしやつた。すると其人は、

「僕が番してあげます」

と言つた。私は、何だかあやしい氣持が起つてきた。こんな知らない人が、誰

だつて泥棒の入つた家なんか、氣持が悪いのに、番して上げるなんて、と思つて、恐しかつた。小母さんは、

「すみまへんけど、あんた一寸警察まで行つて下はれ」と頼まれた。其人は、

「そんなら電話かけて上げませう」

と言つた。小母さんは、

「としちゃん、こゝで番しておいで」

と、私におつしやつた。私はこはかつたので、

「いや、行く」

と言つた。其人は、

「電話どこにありますか」

ときいた。私は、

「材木屋にあります」

と言つた。三人は歩き出した。私はまだ足がふるへてゐた。みんなだまつて歩

いた。材木屋の前に來た。小母さんが、

「ごめん」

といつて中には入つた。私も小母さんの後から、ひつつくやうにして入つた。

材木屋では、障子をあけて、小父さんと小母さんと、二十位の姉さんと、女學校の人が一緒に、火鉢にあたつてゐた。小母さんは、せはしさうに、

「私とこ、歸つてみましたら、泥棒はいりましてん」

と、おつしやつた二十位の女の人は、

「まあ」

と、こはさうな身ぶりをした。

「えらいこつてすな」

と、小父さんがおつしやつた。

「すみませんけど、電話かして下さい」

と、さつきの男の人がいつた。

「どうぞ」

小母さんはおつしやつた。其人は、靴をぬがうとすると、材木屋の人は、

「そのまゝでいいです」

といった、しかしその人は、すぐにかけてしようとしなかつた。私は早くかければよいのにと、いら／＼した。其人は電話口にいつて、

「もしもし」

といつて、警察は何番ですか、と聞いた。そして

「話し中ですつて」

といつた。

「そんなら、交番にかけてみなはれ」

と、小母さんは言はれた。其人はベルをならして、

「交番ですか。西新在家の諏訪仙太郎ですが、お水取りから歸つてみたら、泥棒は入りまして、筆筒から、何からなにまで、皆ひつくりかへつてゐます。大至急来て下さる」

と言つた。私は、何だか味方が出来たやうな氣持がした。家に歸つて、しばらく

くすると、

「ごめんなさい」

といつて、人がはいつて來た。靴をはいてゐるのか、きゆつ／＼と聞えた。巡查が來たのだ。

外で、大きな聲で、材木屋の女の人が、

「諏訪さんここに、泥棒はいりましてんわ」

と言つた。私は、腹がたつた。小母さんも、腹が立つたのか、巡查に、

「すみまへんが、戸を閉めて下さい」

と頼まれた。巡查は、外の戸をあけて、

「おい。みんなやかましい」

と言つた。みんな歸つたのだらう、靜かになつた。

刑事らしい人は、電燈を持つて、足跡や指紋を見てゐた。お座敷には、筆筒から出したのだらう、きれく、づや着物が一ばいであつた。刑事は、

「よつほど、大膽やな」

といはれた。私は、何處かにかくれてゐて、皆歸つてから、出て來たらどうしようなど思つて、ぶる／＼ふるへた。どうか泥棒がみつかるやうにと願つた。お座敷では、誰か、

「なんか、泥棒の落していつた物ありませんか」と言ふ聲がした。

今頃、泥棒はどこかで喜んでゐるだらう。そんなことを考へて、泥棒の散らかしていつた私の洋服を、足でつけた。

【五】好意の持てる文

この文の作者なども、割合落ちついた氣持で、この事件を眺めてゐると思ふ。このやうな事件は、滅多な事ではないことであるだけ、話を聞いただけでも、子供達は随分恐ろしがる。恐怖を數倍に想像して脅える。さういつた氣持が、かく方の心にもある。大袈裟にかいて、人の興味をひかうとする惡戯氣はないにしても、よほど心を落ちつけないと、知らぬ間につひ、大きな言ひ擴げ方をして終ふものである。ところが、この作者にはそれが無い。この年頃の子供には、惡事を見て、非常に憤慨する通性がある。

この子供も、さういふ感を持つてゐる。しかし、

今頃泥棒は、どこかで喜んでゐるだらう。そんなことを考へて、泥棒の散らかしていつた私の洋服を、足でつけた。

と、あつさり片づけてゐる。しかも。この表現は實によく利いてゐる。恐しさとか、腹立ちとか、その他あらゆる主觀から來る激した感情を、乗越えた瞬間でなければ、足でけるといふ餘裕は出ない。その餘裕が尊い。藝術の芽はそこに育くむ。この餘裕を得させるやうに導くのが、綴方の指導である。

家へ歸つた時に、泥棒のはいつたことを知つて吃驚するあたりにしても、親切にしてくれる或男に對する心遣ひにしても、巡查が來てからのこと、材木屋の女の人の話に腹をたてるあたりにしても、普通の感情を普通な言葉で生かしてゐるからいゝと思ふ。とにかく手短かに言つて、力強く生かしてゐる。

【六】指導要領

自分の思つたり感じたりしてゐることに、割増しはないか、割引きはないか。丁度一杯のことを、丁度一杯の言葉で表現してゐるかどうか。自分が自分の作品について、それを知り分けることは却々むづか

しい。何時も自分のものだけを眺めてゐては、その態度は出来にくい。しかし他人の作品を数多く読み聞きして、それを批判する力を、ぼつ／＼に練つてゆくと、自分の作品の色もだん／＼に見えて来る。私は常に、綴方の指導上、机上添削の無駄なことを感じてゐる。自分もあれをやつたことはあるが、骨が折れて効果のない仕事だと思ふ。それを知つたから、今度の子供達には、初めからそれをしなかつた。順を決めておいて、綴方の時間には、順々に出て来て、朗読させることにした。朗読の練習にもなる。その後で、皆が批評し、私も批評し、作者の意見をも聞くことにした。四十分の授業時間中には、五六人は発表出来る。五十人の子供に、月に二回位づつ當ることになる。無論、机上添削を全然やらないといふのではない。文章や文字や文面上の形式（句讀、對話形、句節の列べ方等）の指導のためには、机上添削はよい指導法であることは認める。だから私も、別に「文集」といふものを編輯させて、月に一回づつは私の手許に出させ、また回覽させることにしてゐた。しかしそれも、一々の文に細かく筆を加へたりなどするのではない。大體に亘る批評と心得を、話すだけである。

一般に文章の形式についての批評といふものは、一度やつたからといつて、一度きりで効果を見せるものでない。精神上のことも無論さうであるが、極大體のことを、その度々に、何遍でも繰返して行く。そのうちに、だんだんよくなつて行くものである。だから批判は、急所を軽く簡明につくに限る。一々に亘つて毎度毎度細かい所にまで、力瘤を入れたつて、大概は無駄骨折りになる。子供の力がだんだん進んでくると、一般的な批評はだんだんになくなつて、細かく個人的になる。さうして、綴方は深刻になつて行く。

一人の教師が、月に二回も三回も、大勢の作文の机上添削を引受けたところが、それは出来る話ではない。出来ないのは當り前である。やつたところが、効果の薄い仕事に、それ程の力を入れて、精勤だなど思ふのは、馬鹿げたことだと思ふ。やつて出来ることに、そして、やつて効果のあることに、力を注ぎたいと思ふ。その點、今の教師は、随分無駄な時間つぶしをして、そして、自分の修養時間をなくしてゐると思ふ。教師の時間と努力には、きりつめたものを有効に用ふ工夫がほしいと思ふ。

第五講 感激の必然性

【一】子供の苦勞話

學校では、よく綴方の時間に、綴方を作らせることがある。何行文、何字文の練習とか、手紙文、はがき文の練習とかいふ、特別な場合のものなら、それでよいと思ふ。しかし、一般に綴方と名のつく程の文に、さういふ外部的限制を加へるのは、無理なことだと思ふ。何故、無理であるか。ここに、子供の苦心談をのせてみる。

【二】文例 綴方の番

(五年女兒)

修身の時間の終りだつた。先生は、

「もうみんな綴方を讀んだ組の人、手を上げなさい」

といはれた。名前の書いてある黒板の方を見ると、私の組は六人共、みんなすんでゐた。私は勢よく「はい」といつて、手を上げた。そして、横を見た。手の上つてゐるのは、關さんの組の五組と、私の組の一組とだけだつた。私の前の中西さんが、にこ／＼笑ひながら、

「うれしいなあ」

といつて、胸をなでてゐられた。先生は、一組と五組の人の名を消しなされた。そして、

「次の綴方の時間は、上久保さんから山口さんで、そのつき乾さんで。その次一組ですなあ」

といつて、私たちの方を見なされた。木曜日まで、もう二日しかなかつた。私はあてられたら困るので、

「やあ」

といつて、隣の木本さんの方へこけていつて、かくれた。先生は笑ひながら、

「杉原さんは……」

なんとか言つてゐなされた。のがれたと思つて、顔を上げると、皆私の方をみて、笑つてゐなされた。どうしてだらうと思つて、黒板を見ると、杉原の杉の字だけ、赤のチョークで書いてあつた。

「やあ、かなはんわ」

と、顔をふせて笑つた。先生は、順々に赤のチョークで、四組まで書いて、五

組で行きつまつて、考へてゐなさつた。すると關さんが小さい聲で、

「やあ」

といつて、机の上に顔をうせた。その間に先生は、關と書きなさつた。それから、一番しまひの八組まで書いてしまひなさつた。私は、横を向いて、木本さんに、

「やあ、私あんなこと言はんといたらよかつた。どうしよう」

といつて、足をばたばたさせた。赤いチョークでかゝれた杉といふ字を見て、

「今度、どんなに作る。どんなん作る。題あらへん」

と、机の上に顔をふせて考へた。そして後を向いて、河野さんに、

「私、あんなこと言はんといたらよかつた。題ないし、學校休もか」と、笑ひ笑ひいふと、

「あんだ、あんなこと言ふさかいや」

といつて、名の書いてある黒板の方を見て笑ひなさつた。其の中に始まりのリンがなつたので、皆一度にしづまつた。

それから、上久保さんが帳面をもつて、教壇に上り、読み始めなさつた。私は上久保さんの「ひよこ」といふ題を、くりかへしくりかへして、口の中でいつてゐた。そして、ふと思ひついたのは、うちにもひよこゐるし、あのこと作ろか。お母さんが、時々とり小屋から出してやりなさつたら、ひよこは喜んで、歩くところを書こか。など思つた。その中、その綴方はすんだ。其の時先生が、

「その綴方出して下さい」

といひなさつた。上久保さんは、

「書き直して出します」

といつて、席につきなさつた。私は、私もひよこの綴方をして、先生に「出して下さい」と言うてもらをか。そしたら、うれしいけどなあ。と思つて、上久保さんの方を見た。上久保さんはうれしさうな顔をしてゐなさつた。

その次、山口やす代さんが「小犬」といふ綴方を讀みなさつた。私は、小犬もええなあ。と思つた。けれども、うちに小犬がゐないし、と思つてゐると、次に乾さんの「あはて者」といふ綴方が出た。聞き終つて、さうや、さうや。

私お豆腐屋へおでんがくを買ひにいつて、五つか六つか七つか忘れて、足らんよりは、あり過ぎた方がええと思つて、七つ頼んだことがあつた。それからまた、八百屋へいつて、何を買ふのか、はつきり聞いて來なかつたので、それに似た名前を思ひ出して、姉さんの家が近くだつたから、姉さんに聞きに行つたこともあつた。あれにしよかと思ふと、飛び上りたい様になつた。が、それは、まねのやうな綴方になると思つた。又、急に心配になつてきた。そんなことを考へてゐる中に、

「さあ、おじぎをませう」

といふ先生の聲に、氣がついて、すぐ立つてお禮をすました。

その日歸りに、藤井さんと木本さんと、私と三人で、學校の門を出た。三人はべちや／＼話をしながら家についた。かばんをおいて、お母さんの所へいつた。

「私、木曜に綴方讀むねん。かなはんわ」

といつて、お母さんの肩にもたれた。お母さんは顔をしかめて、

「肩にもたれないどき。木曜日に作つていつて讀んだら、ええねんやないか。早よ作つて來い」

と、さもうるささうに言ひなさつた。

「なんやのん。綴方々々で、そんなに早よ出來へんねんで。お母さん等、知らんねんやないか」

と言ひ返して、私はふすまにもたれ、足を投げ出した。お母さんは、

「そんなに、ゆつくりかゝるのやつたら、早よして來い」

と、あつさりいはれた。

「わかつてるが。書きにいく」

と言つて、半飛びをしながら、勉強室へいつた。箱から原稿用紙を出して、考へたが、題がわからなかつた。

「何しよう。ええ」

と、口の中で、人にたづねる様にいつて、机をたたいた。いくらしても、いくらしても、思ひつかかなかつた。かみつきたい様な氣持になつて來た。やう／＼、

「三匹のかひこ」

として、書き出した。大分かいたが、途中で、どうかいてよいか、わからなくなつた。びりつと破つた。腹がたつたので、口の中で、

「わからへん、わからへん」

といつて怒つた。そして、ごろりと横にころがつて、籐椅子に足をのせて、動かしてゐた。あまりきつく動かしたので、椅子は障子につきあたつて、がたんばたんと音がした。そこへ妹がはいつて來た。勉強してゐる様な風に見せて、「五女杉原すが子」と、妹が向ふへいくまで、ゆつくりかゝつて書いた。そのうち、妹は何か持つて部屋を出ていつた。またごろりとねころんだ。しばらく何んだか、考へる様な心持になつてゐると、外の方で、ぼつん、ぼつんと、雨の、木の葉にあたる音がして來た。

突然綴方発表の番が當つたりすると、實際その通りの苦勞だと思ふ。心に感激の貯へのある時であつても、二日の後などと、時間に制限を加へられたりすると、

困る場合が多いと思ふ。子供だから、不平も言はずに、どうにか片つけるが、私自身だつたら、こんな場合に、なかなか「はい」とは言はぬと思ふ。この綴方を讀んだ時、私は自分の態度のよくなかつたことを、反省した。さういふ場合には、遠慮なくそのことを言ふこと、その代り、ちゃんと用意のある人は、かくして黙つてゐるやうなことをしないこと、などについて、子供達にも相談をかけたことだつた。

【二】感激と故意と偶然

感激といふものは、計畫的には一切得ることの出來ぬものである。こんな風な感激を得たいと思ひ、手をかへ品をかへてみても、それは得られない。計畫的に出れば出る程、感激は逃げる。感激がなければ、動機は起らない。動機とは感激が働きかける刹那の心境をいふ。どういふ心になつてみたいと計畫しても、なれるものではない。感激は常に、思ひがけない時、待ち設けない時に、ふつと來る。全く偶然である。偶然であればある程、深刻であり、新鮮である。今も例にした「綴方の番」の作者の言ふ通り、友達のKが「ひよこ」を材料にして文を綴り、先生から賞めて貰ふ程

のものが出来た。自分の家にもひよこを飼つてゐる。可愛いと思つてゐることもある。しかし、それを文にしてみる程の感激が湧いて来ぬ。感激する程の事件が、自分の手許へ来ない間は、あせつてみても、動機が起らぬ。そこで作者は、

「これでは、まねのやうな綴方になる」

と、あつさりつき離してゐる。立派な態度だと思ふ。

無論、人から啓發されて、動機づく場合も少くない。人の文章を読んだり聞いたりしてゐるうちに、今迄心の底に沈んでゐたものが、急に頭を上げ、熱を持始める場合である。しかし、それはそも／＼偶然に來た動機で、動機を得ようと、待構へて得たものとは違ふ。何氣なく讀んでゐるうちに、さうなつたのである。小説を作る場合には、さういふところから動機の起ることがよくあると思ふ。歴史ものを讀んでゐて、感激したことが、自分の作品動機になるといふやうな工合に。全く偶然に來る動機である。故意につくつた感激は、皆嘘である。さういふ感激からは、本當にいいものは生れない。心に計畫のない時には、聖いもの美しいものに出逢つた場合に、心の芯から喜び感心することが出来る。子供のやうに、

嬉しさの餘り小踊りさへせる。しかし、心の中に、何か故意な下ごしらへを持つてゐる時には、その喜びが、下ごしらへを持つてゐるだけ、それだけ減る。立派な藝術家の、立派な作品は、みんな曇りない明鏡に影さした、偶然の光から生れるものである。

【三】指導要領

それでは、どういふ風にすれば、子供にその機會を多く得させることが出来るかといふことになる。生活境遇を、ひろげてやることだと思ふ。朝學校に來たなら、午後學校の退ける迄、教室に入れきりで、一通りの仕事ばかりさせる。そして、宿題を持たせて歸し、朝になると、また學校に來させる。そんな風なことばかりさせてゐたのでは、どんなよいものが足許まで來てゐても、それに氣のつくゆとりがないのは當り前である。さういふ生活の中では、綴方に限らず、創造的な仕事は、一切出来るものではない。若し出來たら、餘程の天才か、でなければ、そんな生活でも出来る程度の、力弱いものに相違ない。創造だの創作だのいふ仕事は、心に感激を持たない限り、決して出来るものではないのだから。餘り世間狭い量見を出さずに、少しはのんびりとし

た氣持にならないと、本當の教育らしい仕事は出来ぬ。

この夏、ある海水浴場で感じたことだが、海岸で私共の借りてゐた家の傍の合宿所に、或る都會の或る小學校の子供達が宿つてゐた。子供が百人餘りと、教師が五六人、それに看護婦などもついてゐた。彼等は、朝はまづ食前に合同體操をやる。食後二十分の休憩をおいて、二時間ばかり海にはいる。夕方また一時間程勉強する。そして、夜は早くから寢床につく。そのやうな生活を續けてゐた。見てゐて、何だか子供が可哀さうな氣がした。海は危険の心配のない、全くの遠淺だし、海岸は廣く、松原は一里餘りも續いてゐる。山もあれば、大川もある。島遊びも出来れば、魚釣りも出来る。そこはまた有名な漁業地でもある。自然の景色にも可なり恵まれた土地である。大人の海水浴場としてはとにかく、子供の海水浴としては、申分のないところだと思はれる。而も、ほんの近頃知られ出した土地なので、保養地によくあるやうな、厭な俗風に染んでもゐない。都會の子供を、偶々そのやうな場所に連出して、幾日間かの生活をさせるのに、算術や修身や讀本や習字の教科書まで持たせて来て、ここでも規定の授業をさせたりする必

要が、どこにあるのであらうか。世間狭い人達だと思つて、少々あきれた。そんな所まで、わざわざ何をしに出かけて来たのだらうといふ氣がした。その合宿所へ、電話を借りに、私は時々出かけた。その時に私の噂でも出てゐたものだらうか。或日私が海岸の砂の上に坐つてゐると、その一人の先生が来て、私に話しかけ、子供の綴方を二三見てやつてほしいと言つたりした。私にはとても出来なない仕事だと思つたから、私はその話を紛らして終つた。少し出過ぎた言葉かも知れないが、そのやうな生活から生れて来る綴方は、見なくても解つてゐるやうな氣がした。見ても愉快にはなれないものばかりに、決つてゐる氣がする。彼等は、さう世知辛い考を出すのではなくて、何故もつとゆつたりとした氣持にならないのだらう。大した害がないなら、活動寫眞を見せるもよからうし、二時間や三時間の授業は放つても、時々一緒に遊びに出かけることもよからう。お話の會をして、半日を過すのもよからうし、偶には、二時間三時間を續けて、運動競技の試合に興じさせるのもよからう。授業にしても、第五課の次にはきつと第六課、上巻の次にはきつと下巻、といつた詰込み本位でやるのではなく、取入れて悪く

ない讀物なら、遠慮なく取入れたらよいと思ふ。無論さういふことは、監督者との間に十分な理解をとつてやらなければならぬ。大勢の共同生活では、その心得が大切だと思ふ。

生活の範囲をひろげ、内容を豊富にしてやれば、それだけ感激を得る機会が多い筈である。よい綴方を少しも讀まさないで、よい文とはこんなのだと口で言つても、よいものを解らせることが出來ないと、同じ道理である。よい感激を得させるも得させないも、動機づかすもづかせないも、みんな生活の内容から來ることである。教授方法だけが、どんなに變つても、生活の内容が變らない間は、結局は成績の上りやうがない。

【四】感激の貯へ

うれしいこと、悲しいこと、美しいもの、聖いもの、さういふものから受けとる感激は、誰の心にも、その場まりで消して終ふには惜しい氣を起させる。日記を書かうとする氣持は、ここから出る。自分の好きな着物は、糸が抜けるところ迄看ても、まだ捨てる氣になれないのと、同じ道理である。藝術に志す人は、手帳を手離さない。その場合の感じを、大事

にとつておくのである。そのやうな生活が、子供にもある。綴方の味がだんだんに解り出し、それに興味を持ち出してくると、子供は感激を粗末にしなくなる。理屈なしに、只、とつておきたいと思ひつくのだ。文にしてみたいといふ動機が湧いてくるのだ。綴方はさういふ場合でないと、すらりと作れない。さういふ場合だと、自然に熱が出る。長いものでも樂に書きこなすことの出来る。興味のとく綴方は、自由な時間に、何時でも作れることにしなければならぬ理由は、そこにある。主として放課後の仕事、または自由時間中の仕事、家庭での仕事、まづさうならねばならない性質のものである。その結果を、どういふ順序で指導するか。そのことは、この項の初めにかいておいた。以下、だんだん内容を深めて、話を進めよう。

第六講 本當によい綴方とはどんなのを言ふか

【一】文例

今迄に出した文のうち、「推薦」「お祖母さんの死」「泥棒」の三つについてその讀后感と、それ等一々の文について述べておいた私の感想とを、改めてこゝでもう一度思ひ出して貰ふことにする。さうして、次に出す三篇とをずつと續けて貰ふことにする。その上で、全六篇を概括して、本當によい文とはどんなのか、何故にその文が本當によいのかといふ、私の考を述べてみたいと思ふ。

お 使

(六年女兒)

表で遊んで歸つて來た。

「一寸、末ちゃん」

と、中の間から、お母さんの呼ぶ聲がした。

「ふん」

といつて、急いで座敷へ飛び上つた。

「なに」

と、お母さんの居る中の間まで行くと、お母さんは、かつを節の箱とお菓子の入つた箱を自分の兩方へ、一ぱい廣げて居た。

「あのな、一寸、お使ひに行つて來てほしいねん」

「何所へ」

「柳澤まで」

私は、大たい見當がついた。きつと、此のお菓子か、かつを節を、持つて行つて來てくれたら、と思つた。

「ふん／＼。このかつを節か」

「ううん。お菓子」

「何て言うて持つて行くの」

と言ふと、お母さんは、すぐそばにあるお菓子の箱を持つて、
「これな、今日十二時の汽車で、皆歸らほりましてんけど、こんな暑さの事ですさかい、ごちや／＼した物は、何も持つて歸らほりませんから、こんなしやうもない物ですけれども、一寸、おすそ分けです。と言ふのやで。わかつた

か。それからな、姉さん、どうしてひやはります。と聞かはつたら、氣げんよ
うしてゐると言ふ事です。と言ふのやで」

と、私の方へお菓子の箱を出した。中々體裁の良い木の箱だった。私は風呂敷
入れから風呂敷を出して、其の箱を包んだ。

「そしたら行つて来るで」

と言ひながら、すぐ其の箱を横だきに引つさげて、庭に下りた。

「一寸これ」

と、又お母さんが呼んだ。

「これ、そんな事して持つたら、お菓子つぶれてしまひますがな。ちやんと、
かうして持つてお行き」

と、手を乳の所まで上げて、よく娘さん等の持つ様な仕方をして見せた。私は
いやらしいと思ひながら、お母さんのした通りに持つた。

走つた。中の木箱がゆれる。まがり角まで来ると、茶の會社へ働きにいつて
ゐる人々が、お辯當箱をかゝへて歸つて来た。ちりん、ちりん。後から二臺續

いて、自轉車が走つて来た。私は、左へよけた。しばらく走り續けてゐると、
もう柳澤の門が見え出した。

「あゝもうあすこや」

と思つて、さつさと歩いた。私は門の中には入つた。かなり廣い庭先は、きれ
いに掃除が出来てゐて、塵一つなかつた。菱形の飛石が、ぼつくと氣持良く
目立つてゐた。正面の格子戸の上から、大きな木の枝が、ぬつと出て居た。其
所から、蟬がちぢ……と鳴いてゐた。がらつと入口の障子を開けた。

「ごめん」

中では、おばあさんと、よその人らしい人とが、

「まあなあ、喜んでなはるやろ。男の子やし」

「へえ」

と、言ふ話聲がして、中々返事がなかつた。私は、も一度呼んだ。まだ返事が
なく。

「ほんまになあ、男の子はめでたい」

「初めての子ですさかいな」

と、又二人の話聲がした。なんや。二人連で、話ばつかりして。お客さんあるくせに。男の子がどうか、かうとか。男の子がなんでめでたいの。自分かて女のくせに。私は少し腹が立つて来た。今度は大きな聲で、

「ごめん」

と、前よりもずつと大きな聲でいつた。其の時女中さんの聲がした。

「はす」

と言ひながら、がらつと中戸が開いたかと思ふと、女中さんが、赤いたすきをはずしながら、私の方を向いて、べこつとおじきをした。私もすぐおじきをした。

「今十二時の汽車で、お母さんも皆歸らはりましてん」

「さうですか」

私の話がまだ終らない中から、女中さんが、いかにもわかつたらしく、口を入れた。

「けれども、暑い時の事ですさかい、何一つおすそ分けする様な物あらしまへんねけど、これほんの少しばかりの、おすそ分けです」

と、私は風呂敷から、木箱を取り出した。そして、女中さんの前へつき出した。

「まあさうで御座いますか。一寸、其の風呂敷お借し下さい」

「いゝえ、もうこのまゝ歸らしてもらひます」

私は、女中さんの持つてゐた風呂敷を引つばつた。

「いゝえ、一寸」

女中さんも、又引つばつた。私は、思はず手をゆるめた。其の拍子に、女中さんは、風呂敷を持つて、中へは入つてしまつた。はつ。と思つた時には、手には何も無かつた。私は一人庭に立つてゐた。そして、天井を見たり、外を見たり、目をぐるぐる廻せてゐた。庭先から、ちぢ……と、蟬がやかましく鳴いてゐた。此の暑いのに、蟬鳴きよつたら、よけい暑苦しいわ。と思つて、庭先の方をのぞいて空を見た。空には、箒ではき流したやうな白雲の中に、赤雲がま

ちつて、空の大部分まで廣がつて、青空が所々に見えてゐた。きれいな空と思つて、ちつと見つめてゐた。地面を見ると、こちらのすみにある、二三本の日輪草が、ぐんなりして、赤い七八つの花がしほれてゐた。向ふの方の二つばかりの朝顔の鉢植も、ぐんなり葉がしほれて、明日咲くつぼみらしいのが、一つ見えてゐた。

と、又家の中の天井を、ぐる／＼見廻してゐると、ふと、西の方のすみにすゝいや、ほこりなどついた、うす黒いくもの巢がべたつと、五寸四方ほどに、張つてゐた。「やあ、こゝのん、庭先ばかり美しうして、あんな所に、きたないくもの巢が、べつたり張つてる」と思つて、ちつと其所ばかり見てゐた。ふと、氣がついた。「やあ。うちもう此所の家に、大分長くゐるわ。早う風呂敷返してくれたら良いのに。あゝ早う返してくれたらよいのに」と思ふと、今更の様に待ち遠しくなつた。

其の時だつた。すうつと玄關の障子が開いた。ハット、思つて見ると、障子の間から、おばさんの顔が見えてゐた。

「おゝ末ちやんですか。きびしい暑になりましたな。長い間御無沙汰して、お宅へも、よう寄せてもらひませんと」

おばさんから氣候のあいさつをされて、私は、「こんな時、どういうてよいのか、私わからへん。かなはんわ。」と思つて、まご／＼した。

「くす」「くす」

私は、二三べん、へい／＼を續けた。顔が熱くなつた。おばさんは、すぐ調子をかへて、

「姉さん、なんですか。行かれましたんで、淋しうなりましたやろ」

と言つて、おばさんは、にっこり笑つた。私もにっこりした。が、おばさんの返事には、困つてしまつた。又、おばさんは調子をかへて、

「今程は、結構な物くれはりまして、よろしう言うといて下さいや」
私はもうおばさんの話がすんだと思つて、すつとした。すると、又、

「なあ、姉さんも今頃、氣が張つてゐられますやろ」
と言つて、又おばさんは、にっこりした。

「へえ」

私は「へえ」「へえ」ばかり言つてゐるのが、なんだか恥づかしく、きまりが悪くなつた。ふと、いゝ考へが ついた。

「姉ちゃん、氣げんようしてゐるで、言ふ事ですさかい」
と、お母さんから言ひつけられた事を、自分から言つた。

「さうですか。そら結構ですわ。お父さんも、お母さんも、つかれてゐやはりますやろ」

と、どこまでも、おばさんが、愛想よく言ふので、私は返事が出来なかつた。其の中、おばさんの話は、お終ひになつたらしい。自分の横から、私の持つて行つた風呂敷を出した。風呂敷の中には、何かは入つてゐるらしく、ぶつとふくれてゐた。

「よろしう言うといて下さいや。一ぺん寄せてもらはうと思つて居りますねけど、まだよせてもらはないでゐます。又あんたも遊びに来て下さいや」と言つて、風呂敷を私の前に出した。

「へえ、おほきに。さようなら」

と言つて、私は風呂敷を受け取るなり、飛ぶ様にして門口を出た。私は、すつとした。

「あゝあ。あんな所にゐたら、まるで穴の中へはいつた程、きうくつやつた」
と思つて、氣がついた時には、背中に、じつと汗がにちんでゐた。

「やあさうや。此の中に何はいつてるのやろ」
と思つて、ぐつとおさへて見た。すると、中がさつと紙の音がした。

「やあ、紙に包んであるわ」
あまり、かたさうな物ではない。

「何やろ、何やら變な物やわ。一體何やろ」
と思つて、私は風呂包づつみを、耳のそばでふつてみた。中ではやはり、紙と紙とがすれ合ふ、がさつといふ音の中に、どすん／＼といふ様な、變な音がしてゐた。

「いよく／＼けつたいなものやわ。何やろ。何やろ。私見たうなつて來た。一寸

見ようかしら。梨やろか。そんなものでもないし、バナナやろか。自分の好きな物ばかり、考へてたつて、まさか、そんな物では、ないやろし。もう一べん音きいて見よう。と思つて、又、耳のそばでふつて見た。けれども、やはり前と同じやうな、がさ／＼といふ音の中に、どす／＼といふ變な音がしてゐた。「何やろ一たい。あゝわかつた。おまんじゆうや。あゝさうや。それで一寸、やはらかして、どす／＼するやうなねんわ」

はじめて、本とらしいことを思ひ出した。「やあ、さうやけど、又何やら、うそのやうな氣もするわ。何やら一つもわからへん。一寸見よう。お使ひの歸りに、見るの悪いけれど、かうなつたら、どうも、しやうあらへん」

私は見ることにきめた。

「そのかはり、一寸だけ」

と、一人で相談して、一人できめた。そして、風呂敷の間を、そつと、二本の指で開いて、中をのぞいた。中は、私の思ひ通り、紙だけが見えた。

「やあ／＼此の紙の中には入つてゐる」

と言ひながら、思ひきつて、風呂敷を開けてみた。

「いよ／＼この紙の中や」

そつと、紙をめくつた時、青い葉らんがちらつと見えた。

「やあ、葉らんや。おまんじゆうに葉らんなんて入れてないし」

と思つて、手早く紙をのけた。目についたのは、赤や緑で色取つた花餅であつた。

「やあ、花餅やなんぞと、蚊の涙程も思つてやしなかつた。それでも、きれいにしてあるわ」

歩きながら、ちつと見とれてゐたが、

「こんなことしてたら、かつかうが悪い。早よ歸ろ」

と、元通りに包んで、どん／＼走つた。まがり角の所まで来ると、働いて歸つて来た人達が十人ばかりも、手に何か持つて歸つて来た。私は、かまひなしに走つた。とう／＼門の所まで歸つて来た。

「たゞ今」

と、大声を出した。

「御苦労さん」

お母さんの聲がした。

・「お母ちゃん、花餅もろて来てんで」

「えゝ。お前もろ見て来たんか」

「ふん。見たら、お行儀悪いと言ふこと知つてたのやけれど、一寸だけ見てん」

私は、叱られるかと思つて、びくつとした。けれどお母さんは、一寸笑つて、

「何て言ははつたん」

「よろしう言うといてくれて」

「たゞそれだけか」

「ううん。まだもつと、やゝこしいこと澤山言ははつたのやけれども、忘れてしまつた。なんや、愛想よう言ははるから、返事にこまつたわ」

「おおしつかりした使ひだこと。向ふの返事忘れてしまふなんて。それも皆、

花餅の爲やろ」

と、お母さんは、にっこり笑つて言つた。

お か ず

(六年女兒)

日のくれる頃だつた。私は自分の室へ入つて、机によりかゝり、庭の方をながめて居た。お庭へ水をうつた後なので、南天の葉に水玉があつた。大きい姉さんが来て、

「さくちやん。御飯いたゞこか」

といつた。私は、

「よつしや」

といつて、姉さんについて、臺所にいつた。坐蒲團を取つて来て坐つた。食卓の上を見ると、私のきらひな鯛のおみそ汁と、お魚のすみそあえとが、ならべてあつた。私は、今まで楽しみにしてゐた夕飯のおかずが、きらひなものだつたので、顔をしかめた。女中が、

「嬢さん、御飯つけましょか」

と、お盆を出した。私は、自分がおかすがきらひでも、女中にあたつてはいけないと思つて、すなほに、

「ふん、つけてもらほか」

と、お茶碗をお盆の上においた。直ぐ、又お茶碗が、私の手に渡された。受け取つたのは受け取つたが、どうして食べようかと思つた。目をおかすからはなして、妹や姉さんの方に向けた。皆は、食べるのに夢中だつた。私は、どうも出来ないで、茶碗を持つたまゝ、皆の食べるのを見てゐた。

お汁の中の鯛の身をたべては、お汁を吸ひ、又すみそあえに手をつけて、口の中に入れてゐた。どうしよう、どうしようと思つた。お風呂から上つてきたお母さんが、火鉢の前へ坐つて、好きな煙草を吸ひ始めなかつた。學校で、池田先生が、

「人生の幸福は健康にあり」

といひなかつたが、今の私では、

「人生の幸福はおかずにあり」

だと考へた。お母さんが、

「さくちやん、早よ食べんか」

といつた。私はまだ、一口も食べてゐなかつた。皆は、もう一ぱい目がすんで、二はい目にかゝらうとしてゐた。女中にたくあんを出してもらつて、お皿にとつた。それで食べようと思つた。御飯を口に入れると、もう冷くなつてゐた。

「もうこの御飯、冷くなつてる」

とつぶやいた。其の時女中が、

「嬢さん、鯛のお汁きらひですのんか。好きやつたら、早よ食べはらんと、お汁冷めますせ」

といつた。私は、

「これか。これ私、大つきらひや」

といつた。女中は、驚いたやうに、

「なんですの。私やつたら、喜んで食べるけどなあ」

と、首をのばして、目を大きくした。お母さんが、

「はつ。この子な、肴きらひて言うて、いつも食べへんねんで」といつた。女中は、

「なんでやるな」

と、もう一べん言つた。私は、少し耳の方が熱くなつてきた。中の姉さんは、なんでも食べるし、私の家では、一番の、たくさん物を食べる人だつた。その姉さんが、

「おさくさんみたいな、あほうあらへん。ふん」

と、鼻で笑つた。いつも姉さんは、「ふん」と鼻で笑ふので、なんとも思はなかつた。

いつもなら、「ごちさうさま」といつて立つのだが、今日は、何も言はないで、坐蒲團を持つて立つた。お母さんは、

「今日みために、たくあんばかりで食べるから、からだ弱いねんが」といつた。私は、

「それでも、何もおかすがないのだから。どうも仕様がなすが、と、口返しをした。

一人旅

(五年女兒)

今日は休みだと思ふと、朝から目はさめかゝつて居たが、ゆつくり寢床にはいつてゐた。九時頃に、朝御飯をすました。お母さんが、

「お父さんが、昨日、万年筆と袴を忘れて行きなかつたから、持つて行つて来なさい。驛まで送つて上げるから」

と、おつしやつた。行かうかと思つたが、この頃きいた子取りの事が氣にかゝつて、若し、取られたらと思つた。

「行きたいけど、子取りに取られるかも知れへん」といつた。

「めつたに、そんな事は無いから、行つて来なさい。お父さんが、こまりなさるよ。万年筆はないし、お葬式があるのに、袴が無いのぢや」

と、いひなさつた。それもさうだと思つて、行く事にした。

大急ぎで、洋服をきかへた。そして、學校へ行く時のかばんに、第一に、汽車の中であむやうに、リリヤンと、そのあむものを入れて、小さい手帖と鉛筆と、万年筆と、ほろたいまで入れた。お父さんの万年筆を入れて、袴を入れようとしたが、はいらなかつた。それで、ふろしきに包んだ。二つも持たなければならぬので、袋をふろしきの中へ、一しよに包んだ。すつかり用意をして出かけた。驛につくと、まだ十二分あつた。お母さんが、切符を買つて下つた。一人で行くのが、急にこはくなつた。

「こはい人、居やへんやらうか。今、五圓程持つて來たけど、取られるかも知れないわ」

といつた。汽車の中へはいると。お母さんも、はいつて下さつた。すはる所が、澤山あいてゐるが、おばあさんの前にすはつて、早速リリヤンを出した。お母さんは、

「氣をつけなさいね」

といつて、出て行きなさつた。一分間のベルが鳴りやんで、動き出すと、お母さんが、首を振りなさつたから、私もふつた。見えなくなると、リリヤンを出した。前のおばあさんが、

「どこまで行かかります」

といつた。私は、こはこは、

「桃山まで」

といつた。おばあさんは、

「かみこままで、もうどの位ありますか」

といつた。

「もうすぐです」

といふと、横にゐた男の人も、

「もうすぐです」

といつた。聲が合はさつて、へんな聲になつた。それと一しよに、其人がこはくなつた。おばあさんは、

「これ食べなはれ」

といつて、赤や青のおかきを五つ程くれた。氣持が悪かつたが、
「ありがたう」

といつた。其のおばあさんは、かみこまで降りた。男の人は、急に一人になつたので、のびをしてねころんだ。財布を取られはしないかと思つて、つかんでみた。中には入つてゐる切符が大事だと思つて、すみの方で、そつと見ると、有つたから、安心して、一心にまた、あみ出した。

途中で、どこを走つてゐるのやら、わからなくなつた。すぐ、宇治についたから、安心した。もう片づけて、外の景色を見てゐた。こはたもすんで、次が桃山になつた。ふるしき包をかゝへて、出口の方へ行つた。

間も無く止つた。降りて、改札口で、切符を半分切つてもらつて、外へ出た。もう、こはくない。と思ふと、ほつとした。道のまがり角には、牛が居た。道にきたない着物をきた子供が、遊んでゐた。やつぱり、田舎くさいなと思つて通つた。嫩草山の山焼きのことや、色んなことを考へてゐるうちに、目的の所

へ來た。違つてゐたらと思つて、よく見ると、やつぱり、

「根津」

とかいてあつたから、安心しては入つた。勝手口から、

「ごめん下さい」

といつて、は入ると、しづといふ女中が、

「はッ」

といつて出て來た。私を見て、

「まあ、お一人で」

といつて、びつくりした。一人で來たのが、うれしくてたまらなかつた。そして、汽車の中であんた、ひもを、しづにやつた。

【二】作者の個性のよく出てゐる文

以上の六篇を讀んで、それ等の作者の、個性を想像してみた時に、容易に言ひ當てることの出来るのは、「推薦」の作者、「お使」の作者、それから、「お祖母さんの死」の作者であると思ふ。「推薦」の作者のことは、あの所でも言つたやうに、

現代式の氣の軽い、よくはしやぐ子供である。さういふ性の子供であることは、あれを読むとはつきり解る。「お使」の作者は、末つ子であるだけ、末つ子らしい人のよさを持つてゐる。しかし、却々頭のよい、考へのしつかりした子供である。十五枚にわたるあの長い綴方を讀んで、讀者は誰でも、さういふことに氣づくだらうと思ふ。「お祖母さんの死」の作者も、頭のいゝ子供ではあるが、この子供には、「お使」の作者のやうな才氣ばしつたところがない。後で出さうと思つてゐる綴方で、或る子供の作つた「よつちやん」といふのがある。「よつちやん」といふ子供が、いろ／＼滑稽なことを言つたり仕たりして、皆を笑はせることがかいてある。その「よつちやん」が、「お祖母さんの死」の作者である。「よつちやん」を参考に讀んで貰ふと、この作者の性質がよくわかる。眞面目くさつた顔をしてゐて、随分冗談の言へる、面白い子供である。さういつた三人それ／＼の個性が、文章の上に非常によく出てゐる。

「推薦」については、前に言つたから、ここではそれを思ひ出して貰ふことにしておくが、作者の氣の軽さが、文章のそこそこに出てくる。はしやぎ好きな個性が、文章の上では、多少誇張味をもつて、場面をはなやかにさせてゐる。次に、「お使」について考へてみる。まづ初めに母親から呼ばれて、母のゐる部屋へはいつてゆく。

「あのな、一寸お使に行つて來てほしいねん」

「何所へ」

「柳澤まで」

私は大たい見當がついた。「きつと、このお菓子か、かつを節を持つて行つて來てくれたろ」と思つた。

と、まあかういふ調子に、頭がよく働くのである。それから、風呂敷包みの持ち方を母に教へられて、家を出て行くあたり、實にできはきとした感がする。向ふの家にいつて、自分の行つてゐることには氣づかずに、奥の方で勝手な話をしてゐるのを聞いて、この作者の頭に浮ぶこと。それから、女中がはいつて行つて、おばさんが出てくる迄の間の、作者の觀察ぶりから、頭の働き工合、おばさんとの問答のことなど、劫々たしかなものである。そのへんの所、歸りがけ作者が、

風呂敷の中に入れてくれてあるものを非常に楽しみにして、一寸風呂敷を開けてみるあたりの、子供らしい仕草と、びつたり添はぬ妻さを持つてゐる。この子供は、平生實にここにことした快活な子供であるが、さて仕事にかゝつて、意見の交換でも始めると、實にびつくりするやうな、頭のよいことを言ふ。利巧な子供だと、よく感心させられるが、さういふ作者の個性が、この文章の上に、躍如として出てゐる。

それから、「お祖母さんの死」の作者について考へてもさうである。あれを讀んだ時、葬式の當日は別として、家では悲しい出来事が起り、親類知己が集つて騒いでゐるのに、作者は割合簡単な氣持で、毎日通り學校へ行くところをみて、一寸不思儀な氣がする。こんな日には學校に行かぬものである。自分には、休んで引籠つてゐる程、悲しいことではないにしても、名古屋の叔母さんや、東京の姉さん等が集つて来て、賑やかにしたりすると、つひ甘へた氣持になつて終ふものである。それが普通なやうに思はれる。ところが、この子供は、さういふことには一向引込まれない。普通は忌引してよい日であるのに、平日と變らない氣持で

學校に出て行く。さういふところを初め、さういふ騒ぎの中にあつて、周囲の人々の言動を見て、感じたり思つたりしてゐるところを見ても、その場の氣分に卷込まれたり、人々の感情に引込まれたりなど、ちつともしてゐない。この點、作者としての態度の、相當出来てゐることに満足するのだが、その一面に、個性がかなりはつきり出てゐると思ふ。

【三】まづ中等

以上三つのものは、文章としてはまづ中等の出来ばえだと思ふ。それぞれ、立派な特徴は持つてゐる。しつかりしたものでもあつて、部分的には表現のうまいところも相當ある。しかし、個性が働き過ぎてゐる。これ等の文も、作つた後一二月は箱に入れておいて、それからもう一度讀んでみたなら、自分の文の缺點がある程度まで解ると思ふ。その上で、推敲添削して、發表したものだと、もつとすつきりしたものになつたらうと思ふ。それ程のことの解らぬ子供達ではないと思ふ。その大切な推敲を、彼女達は忽にしてゐたのである。

まづ「お使」について、考へてみる。一番目に立つ缺點は、女中が奥にはいつ

て行つてから、おばさんが出て来る迄の間の、作者の態度だが、庭の様子を一わたり眺め、それから家の中に目を移して、蜘蛛の巣の張つてゐるのを見つけて、考へごとをするあたり、大體にどうも頭のよさが出過ぎる感がある。外の景色をかいたりしてゐるのだが、それらしい和か味がなくて、冷つたい論理的観察だけが、とんで出てゐる。はじめ這入つて行つた時に、奥での話を聞いて、

「なんや。二人連で話ばつかりして、お客さんあるくせに。男の子がどうかかうとか。男の子がなんでめでたいの。自分かて女のくせに」

と、腹を立てるあたりも、全くそれに似た不調和な感がする。丁度その頃、或る子供が「男と女」といふ綴方を作り、それが導火線になつて、二三人さういつた材料をつかつたりした。その中の一つは後に出すことにするが、大人の言葉でいふと、女権擴張風のものである。この作者も、さういふところに、多少引込まれてゐたものと思ふ。でないと、そのことは感じるにしても、直ぐこんな風な考へ方はしなかつただらうと思はれる。それから、おばさんとの問答のところなども、作者は、返事に困つた困つたと、しきりに書いてゐるが、困つてゐる作者自身の

姿が見えないで、面倒臭い程丁寧な田舎の金持の奥さんを引張り出して、こんなに面倒臭い、こんなにうるさいと、言ひふらしてゐるやうな工合に見える。この作者なら、このあたりもつと手際よく片附けることが出来る筈である。

「推薦」については、前に言つた評を思ひ出して貰ふことにする。

「お祖母さんの死」は、「お使」ほどに、その缺點が目立たない。前にも言つた通り、場面が非常に感情的であるのに、作者が割合平氣で、他人の感情に卷込まれてゐるやうなところがないので、讀んで不快を感じない。しかし、このやうな材料を扱つたものとしては、少しだらだらし過ぎて、引締りかたが足りぬと思ふ。緊張味が足りない。この作者の持つ一面の性質が、まだかなり荒けすりのまゝになつてゐる故だと思ふ。

要するに、個性的な文章には、むらがある。いびつなお茶椀と言つた感である。非常によい所もあるが、その反面に、目に立つて悪いところがある。性格が荒削りのまゝ出るのである。次に、残りの三篇のものに就いて述べることにする。

【四】個性を乗越へた文

後に残つた「おかず」「泥棒」「一人旅」について考へてみる。これ等の三つは、前の三篇に比べてみて、

作者の個性が、あんなにはつきり、飛んで出てゐないことに、誰も氣がつくだろうと思ふ。

まづ「一人旅」についてみる。これは五年生の時の作品だが、六年生のもの、中に持つて来て、少しも見劣りがしない。その中に出てくる私といふ子供は、A子でもない、B子でもない、さういふ具體的な個性者ではなくて、一人の少女といつた感がする。この作者の平生には、かなりすねた所もあり、見かけによらない大膽なところもある。さうかといつて、非常な敏感者で、感激し易く、恥づかしがり屋である。しかし、この作品に出てくる私には、さういふ個性上の破綻が少しもない。「一人旅」ではあるが、さう言つた恐しさや淋しさを誇張して考へてゐるところが、少しもない。といつて、かういふ場合によく驛々で、いろんな食べものなど買つたりする子供もあるが、さういふ放浪的な好奇心に動かされてもゐない。五圓もお金を持つてゐると言つてゐるのに。汽車の中の年寄の女のこ

とでも、くどくどしたことは抜きにして、五つ六つくれた「おかき」のことだけで、その場面を立派に生かしてゐる。行儀の悪い男の人のことなども、その風采とか様子など、くどくど見届けたりなどしないで、「あくびをして寝ころんだ」とだけを見てゐる。この年頃の子供達の恐怖は、大體それだけのことで肯ける。そして、自分の財布の中の切符を見届けるあたりも、實に少女らしい自然な氣持がする。汽車の中でリリヤンを編むところも、親しみ深い感である。殊に最後の、
 勝手口から、

「ごめん下さい」

といつてはいると、しづといふ女中が、「はい」といつて出て来た。私を見て、

「まあお一人で」

といつて、びつくりした。一人で来たのが、うれしくてたまらなかつた。そして、汽車の中であんだ紐を、しづにやつた。

と、いふところなど、少女らしい可愛らしさが、實によく出てゐると思ふ。

【五】まづ上の上

私はこの「一人旅」を、まづ上の上だと思ふ。すばりすばり出て、くどくどとしてゐないから、全體がひきしまつて、而もすつきりしてゐる。蕾が今開いたばかりの、一輪の花を見るに似た、正しくて美しい感である。名陶工の手に作られたお茶碗を見るに似た、調子のよい美しさが感じられる。文章全體が、丁度そのお茶碗のやうな、一輪の花のやうな、正しさと美しさを持つてゐるからである。今の女學校の上級生あたりに、この位のものが、さう澤山あるかどうか。少し自慢になるかも知れないが。私はこの作品を、子供の立派な藝術品だとする。

この作者自身は、個性上人並の缺點も持つてゐるし、平生には随分すねたりとする。しかし、さういふ個性上のあらが露骨に見えたりするのは、大抵大勢の中で何かやるやうな場合に多かつた。一人と一人とふれ合ふ時には、さういふあらが、さう露骨に見えなかつた。見えない場合が多かつた。そして、自分で自分のそのあらに、氣がついてゐたらしかつた。大勢の中はいやだと、いつも言つた。

一人の時なら決してしなと思ふやうなすね方を、大勢の中だと、つひして終ふことがあり、後が不愉快だから厭だと言つたりした。

綴方をつくり、その中に「私」といふ自分自身を引張り出してかいてみた時、自分がどんな子供になつて出てくるか、を知りわけけることは、興味深い仕事だと思ふ。人からも批評され、先生からも批評され、さうして、自分の目にもだんだんついて来るやうになる。自分の缺點など、他人から眞向になつて言はれたりする場合に、反抗的な氣持をそゝられることが随分多い。しかし、綴方の中の「私」について、その「私」のしてゐる一々の具體的言動を材料にして、よき行なり、至らぬ行なりと批評されても、作品を中間においてのことだけに、感情はそれ程激しない。それでゐて、自分といふものの言動に、随分興味を感じることが出来る。そのやうにして、綴方は、作者の態度をだんだんに仕上げて行く。この作者など、無論天稟の性もあるが、自己を凝視する態度の相當出來て來てゐる子供だと言はねばならぬ。

私達、綴方教育に志する者は、それを目標として、たわりたわりと歩いて行く

べきだと思ふ。

【六】正しくて美しいもの

「一人旅」は、左様にして、上の上、正しくて美しいものである。「お使」は、相当力應へもするし作者の方では力を入れてかいてゐることは解るが、読んで奥ゆかしさとか、味はひとか言ふものが少い。しかし、個性を乗り越えた、正しく美しい文には、素直な奥ゆかしさが、論理でなく、味はひとなつて、読者の心に迫つて来る。「お使」を力作だといふなら、「一人旅」を傑作だといはうか。まづさう言つた感である。

その意味に於て、「おかず」は相当態度のよいものだと思ふ。台所の様子もよく出てゐるし、中の姉さん、お風呂上りのお母さんなども、よく出てゐる。そこへ持つていつて、この子供は、主観に捉はれて無茶苦茶に、腹を立てたりするのでなく、女中に漬物を出して貰つて、それで食事を済ませてゐる。そこが非常に氣持がよく、親しみ深い。若しこの場合、この子供が、變な道德觀から、嫌ひなものでも我慢して食べるのがよいのだなどと、押しつまつたあきらめごとでもして、女中に漬物を出させたりしたものなら、變に得意がつてゐる子供の姿が見

えて、かなり不愉快だらうと思ふ。ところがこの子供には、さういふ捉はれたところが無い。こんな時、大抵の子供は涙をこぼしたりするかも知れない。この子供にはそれもない。ない代りに、終りのところに、

いつもなら「御馳走さま」といつて立つのだが、今日は何も言はないで、座蒲團を持つて立つた。

と言つてゐるのが、涙をこぼす以上の力を味に見せてゐる。このところ、なかなかよく利いてゐると思ふ。比べてみて「一人旅」には劣つてゐるにしても、それに近い正しさと美しさを持つたものだと思ふ。

「泥棒」のことは、前に言つておいたから、こゝでは略するが、あゝいふ出来事の中に、あちこち動いてゐる「私」といふ子供の姿は、子供らしい素直さをもつて、氣持よく出て來てゐると思ふ。「お使」よりは、一歩進んだものだと思ふ

【七】指導の要領

私は、前項「故意の感激と、偶然の感激」のところ、指導の方法について、一寸言つておいた。とにかく私の指導は、あゝしてそれぞれの材料についての、座談會、批評會といった形で、進んでいく

ことになつてゐる。別に文集といふものがあつて、それではそれで、別な仕事をする事になつてはゐても、大體は、座談會、批評會でやつてゐる。今のところ、それが最もよい綴方の指導法だと思つてゐる。このことについて、今年の三月頃、南光社から出た「綴方教育大觀」又は、去年出た明治圖書の「文の指導とその教室經營」に、その實際の授業の速記録をのせておいた。あれを見て頂けば、實際のことが、よくわかかつて貰へてよいと思ふ。文章の何を、どんな風に談話し合ひ、批評し合つてゐるかといふことが。

第七講 表現に就いての部分的な問題

【二】文例

更に進んで、この項では表現の部分的問題を拾つて、だんだん述べてみることにする。

西 瓜

(五年女児)

晝寢をしてゐなかつたお父さんが、

「これ西瓜出して來」

と、ねぼけた聲を出しておつしやつた。

「うん、よつしや」

といふ、弟の聲がした。私は二階で勉強してゐたが、居ないふりをしてゐた。弟は下駄をはいて、裏の方へ走つていつた。しばらくすると、弟の、

「よいしょ。よいしょ。重たい。重たい」

といふ聲が、二階の窓の下の方で聞えた。私は、

「はゝん。西瓜割らはるねんな」

と思つて、机からはなれて、窓の下を見下した。すると、弟は大きな西瓜を肩

にかついで、内へ持つて入つた。

「さあ、お前ちり取り持つて來い。お父さんは、まな板と、はうちやうと持つて來るわ」

といひなされると、弟は、かなはんさうに、

「うなん、おれにばかり用事さんねん。西瓜たべよと思たら、えらい損やな」

と、ぐすぐすいつてゐた。私は、おくれたら、西瓜食べられないと思つて、そうつと六段目まで降りて見てゐると、お父さんと弟が、まな板の横へすはつて、前へお母さんが、袖なし襦袢をきて、ちよこばつてゐなかつた。弟は西瓜をのぞくやうにして、おしりを上へあげ、頭を下に下して見てゐた。お父さんは、ここに顔で、

「これええで。すいてるわ。お前の頭と一しよや。この西瓜も一寸、腦足らんねん」

と、弟の方を向いていひなかつた。弟は、

「なに言うてんねん」

といつて、又、にこつと笑つてゐた。

「そんなこと言うてんと、早よ割りなはれさ。あんた」

と、お母さんが言ひなされた。お父さんは、

「よし」

といつて、はうちやうを西瓜の上へ、やりなされた。すると、弟が、お母さんの方を向いて、

「これお母ちゃん、白か赤か、あてやひしようか」

といつた。お母さんは、

「よつしや。お母さんは、これ赤やと思ふ」

弟は首をかたむけて、ぼんぼんと西瓜をたゞきながら、

「ははん、これ、白べたやわ」

と、一つかど知つてゐるらしくいつた。するとお父さんは、一寸笑つて、

「なんでや」

と、おつしやると、

「たゞいたらな、ぼんぼんとええ音なるや、つはな、すいて眞赤いけやけど、ぼてぼて言うたらあかんねん」

といつた。お父さんは、

「さうやるか」

といつて、ぶすつと切りなされた。すると、西瓜は二つに割れて、中は眞赤であつた。

「どうや。こねん赤いが」

と、お母さんは、弟にいひなされた。私は其の色を見て、どんどんと段を下りて、奥の縁へ走つていつた。

「お前、どこにゐてん」

と、お母さんは、首を後へまはしておつしやつた。

「二階にゐててん」

「なんや」

と、お母さんは、おつしやつた。お父さんは、すかすか、とこまかく切つてゐな
 かつた。私は、ぶ厚いのをもらはうと思つて、下の方を見ると、はしから三番
 目のと、五番目のとが、三寸くらひの、ぶ厚さだつた。私は、すぐ手を出して、
 其の二つを両手に持つて、裏へ逃げた。お父さんは笑ひながら、

「これこれ。ここここ、ははは」

と、はつきり、よう言ひなさらなかつた。お母さんも、笑つてゐなかつた。弟
 も、

「おれかて、損や」

といつて、又二つ持つて、私の方へ逃げて来た。お母さんとお父さんは、目と
 目とを合せて、何かいつてゐなかつた。

「もう、早よ食べてしまはんな、無いやうになりまつせ」

といつて、お母さんは、一つ取つて食べなかつた。

「ほんまにさうや」

と、お父さんも取つてたべなかつた。

この文に出て来る「私」は、少々悪戯者である。悪戯な子供のしさうなことが、
 滑稽味を持つて出て来てゐる。母親も父親も、そして弟も私も、相當よく出てゐ
 る。對話にも面白いところがある。しかし、この文には、二つの大きな缺點があ
 る。

【二】描寫の深さ

一つは、描寫の深さといふことである。この文の中心となる
 ところは、甘く西瓜の割れたところへ、「私」がぬつと飛んで
 出て、一番部厚さうなところを二切持つて逃げるところだが、この場面をもつと
 躍動したものにするのには、そこへ行くまでの所に、もつとずつと深味を持たさ
 なければならぬと思ふ。ところが、この文では、その用意が殆ど出来てゐない。
 従つて、可なり平面的なものになつて終つてゐる。つまり、そこまでの間に、私
 の居所が、二階の勉強室から、階段の六段目へ、それから臺所へと、三所移つて
 ゐる。移つてゐることは解るのだが本當に移つてゐるらしい感が出て来ない。そ
 こを言つてゐるのである。まづ最初、「私」が二階から、階下の様子を窺つてゐる

ところ、

晝寝をしてゐなかつたお父さんが、

「西瓜出して来い」

と、ねぼけた聲を出しておつしやつた。

弟は下駄をはいて裏の方へ走つていった。

「さあお前、ちり取持つて来い。お父さんは、まな板とはう、ちやう、と持つて来るわ」

と言ひなされると、弟はかなはんさうに、

「うなん。おれにばかり用事さんねん。西瓜食べよと思たら、えらい損やな」

と、ぐずぐず言つてゐた。

など言ふ表現を見ると、「私」が二階から階下の様子を窺つてゐるやうな感が少

しもなく、まるで「私」も皆と一緒にゐて、周囲の人々の言動を、見たり聞いた
りしてゐるやうな調子に出て終つてゐる。本當に二階から窺つてゐる氣持でか
いてゐるものなら、「二階にゐたが、ゐないふりをしてゐた」などといふ言葉も不
用な筈である。階下と二階の出来事で、本當に二階にゐるものなら、殊更ゐない
かなどしなくとも、階下へは解る筈がないのだから。それはそれとして、次に階
段の六段目から、臺所の様子を窺つてゐるところなども、形は六段目にゐたこと
にはなつてゐても、心はちゃんと皆と一緒に、皆の騒ぎの中には入り込んで終つ
てゐる。だから、内容の筋はとにかくとして、その場面場面が、生きて出て來な
い。それらしい姿で、「私」が浮んで來ない。大きな罅で、ごかりごかりと土を堀
起してゐるやうな運び方である。これは少し作者に對して氣の毒な批評になるか
も知れないが、作者は、本當に純な動機から、この作品をかいたかどうか、疑
はしい氣がする。ちゃんと用意が出來た所へ、不意に飛んで出て、二切つかんで
逃げる、あの場合の興味だけに引きずられて、これは一つ、あの場面のことをか
いて、皆を笑はせてやらうとでも意識して、この文を綴つたものではないかとい

ふ氣がする。さういふことをやつた「私」に興味を感じて、悪戯すきなその子供の姿を、うまくかきこなし、てみようといふ興味からかいたものなら、二階から階下の様子を窺つてゐた時の、大事な實感を忘れて、先を急ぐ筈がない。窺つてみた時の本當の感じは、恐らく、この文に出て来てゐるやうな、こんな大ざつばなものではなかつたらうと思ふ。とにかくにも描寫の浅いものだと思ふ。

【三】作者自身の省察

それから、もう一つの缺點は、「私」といふ子供の行爲に對する作者の省察の浅いことである。西瓜を切らうといふので、父母や弟は騒いでゐる。「私」はそれを知りながら、知らないふりであり、ちやんと用意の出来るまで、よそから窺つてゐる。用意が出来る。中味の紅い美味しさうな西瓜だ。ここぞといふので、飛んで出て、列んでゐる西瓜の切れのうち、一番部厚なのを選つて、二切つかんで逃げる。悪戯といふには、少し品が悪過ぎる。しかも、そのやうな野卑な悪戯に、興味を感じて、何等の省察も加へずに、その悪戯だけのことを、面白がつて綴方にかいたりするのは、悪趣味である。やつたことはやつたが、さてその後、どんな心が残つたか。その省察がないの

では、記録だとは言へても、綴方だとは言へぬ。修身訓話のやうな、紋切型の反省のことを言ふのではない。その時その場に應じた、何かの具體的省察が、作者の心に浮ぶ筈である。それが浮ばないのなら、その子供は悪戯の出来る手腕は持つてゐるが、綴方の作者となる態度を持つてゐないことになる。昔の自然主義文學の中には、この「西瓜」のやうな作品が多かつたかも知れない。あつたことを、ありのままにかき放すのだ。それならば、新聞の三面記事と一緒に、苦勞してかく程の、価値のないものである。綴方とも作品とも藝術とも言へない。だから読んでみて、この綴方は全く他愛がない。子供の藝術らしい力をもつて、こちらへ應へて來ない。只、アツハハハハ。と、低級な笑ひを誘はれるだけである。要するにこの綴方は、凡てに淺薄だからである。

【四】文例

次に、また一つ綴方を出して、別な問題を拾つてみることにする。

六 甲 山 へ

(五年女兒)

もうちぎ五年になるといふ、春休みのことだつた。夕方、庭さきで遊んでゐ

ると、貴ちやんが、日本アルプスや白馬岳、やりが岳へ行つたことをいばり出した。

「皆アルプスへは、よう行かんこと決つてる。知れたことや。敏子ちゃんなんて、三笠山へもよう登らんのに」

と、からかふやうに言つた。私はこの時、なんとも言へぬ口惜しさが起つてきて、一人でアルプスへ登り、いばらうといふ氣も起り、私だけ連れていつてもらへなかつたら、ついでに行かうといふ氣も起つてきた。はらが立つたので、

「私三笠山ぐらゐ、よう登りませ。すみまへんな。私だけ連れてくれへんかつたら、ついででも行つたる」

といつて、がんばつた。さういふと、貴ちやんが、

「敏子ちゃんやら、ひさつちやん、とつてもや」

と言つた。これを聞いてゐた正ちやんは、よい氣になつていばりだした。

「貴ちやん。おれなら行けるやろな。もう奈中の二年やぞ。おまへら二人ともまだ五年になるとこやないか。あくか」

と言ふと、貴ちやんが、

「そやな、正ちやんなら、日本アルプスはあかんけど、ほかなら、たいてい行けるやろ」

と言ふと、よけい良い氣になつて、

「行けるわい。行けるわい。連れてくれよ。貴ちやん」

と、正ちやんは、拜むやうにいつた。私とひさつちやんとは、怒つて目がねをとつた。貴ちやんは八度といふ、きつい近目であつたからである。貴ちやんは、

「かうさんや。二十二日は休みやよつて、敏子ちゃんと、ひさつちやん、正ちやんと六甲山へ連れたる」

といつた。三人は飛び上つてよろこんだ。さうして二十二日を待つて、勉強もろくにせず、とうとう二十二日が來た。なんだかうつとしいお天氣だつた。この時、

「敏子ちゃんだけ止めとき。あぶない」

と言はれて、よけい氣がいらいらしてきた。さうして、わざと、びしやんびし

やんと、きつい音をさせて戸をしめた。正ちゃんは、怒つてることを知つたが正ちゃんも貴ちゃんも、よそへ行く時は、きつと雨が降るので、雨男といふあだ名をつけてやつた。

あくる日に延ばして行くことに決めた。あくる日も連れていつてもらへないので、怒つて髪もいはずに、泣いてこたつの上にもたがつて、

「比叡山にも六甲山にも登山したことのない者に、一べん連れてほしいな」と、わざと大きな聲で言つた。それでも連れていつてくれないやうである。お父さんが、

「敏子、お前今日お父さんと、さき奈良へ歸るか。友ちゃんと後から歸るか」といひなさつた。私はこれを聞いて、

「そらお父さんと歸るが。おんなじ六甲山へ連れてもらはんのやつたら。待つてもしやうがない。連れてくれんのやつたら、やつぱり今すぐ歸る方がええわ」

と、わざといつた。するとお父さんは、

「そんなに行きたいのに、いちばつて、後からすねたら、かへつてしんきくさ」

とおつしやつた。この時私は心の中で、もう行けると思つた。それでも私は、まだぶつぶついつて、

「今頃から連れてやろていふのんやつたら、なんで、もつとさき言うてくれへんの」

といつた。お母さんは、六甲山へ行かないで、大阪へ連れてやらうと言はれたが、大阪なら何時でも行けると思つて、大阪へ行かないといつた。それで少しお母さんにすまないやうな氣がしたので、

「あのな、母さんとでも行くねんけど、帶したり着物きたりすんのん、長いことかかるよつて、かなはんねん」

と言つておいた。お母さんもお父さんも貴ちゃんも、聲を揃へて笑ひなさつた。又弟が、

「姉こ。久しぶりで連れてもろて、どら姉こやのに、もつたいなすぎる」

などと、ひやかした。やがて、私もケープをきて、正ちゃんや、ひさつちゃんや貴ちゃん、家を出た。貴ちゃんが、

「敏子ちゃん、外へ出たら氣すつとして、すねるにすねられへんやろ」といつた。ぶんぶん歩いてゐると、貴ちゃんが、

「四人ゐるよつてん、一人何か言ひ出して、二人まで賛成せんなら、それ聞かへんのんしよう」

と言つた。しばらくは、皆六甲山の想像でもしてゐるのか、だまつて進んでいつた。やがて正ちゃんが、

「自動車にのつていけ」

と言つた。すると、ひさしちやんと私とが、

「賛成。それに賛成」

と手をあげた。正ちゃんは、

「どうや貴ちゃん。四人ゐるし、一人もの言ひ出した時、二人まで賛成せん、あかんときめたこと、敏子ちゃんもひさつちゃんも、賛成したし。早よ自動車

はりこまんか」

と言つた。それについて、私もひさつちゃんも、

「そや、そや」

と言つたので、貴ちゃんは、かうさんして、

「あんまり無理や」

と言つた。それで一寸怒りながら進んで、驛へくると、澤山の人だつた。

「こんな早いのに、今日にかぎつて、人が多いな」

と言つた。さうして貴ちゃんが切符を買つて來たのを持つて、改札口まで行つた。切符を切つてもらつて、電車を待つた。もうこの時は、繪葉書でも買ひ、杉原さんに送つて上げようと思つた。だが、そんな考はすぐ止んで、早く頂上まで行き、萬歳をしたいと思つた。すると、登山してゐるさまや、頂上でお辨當を食べたりすることも思ひ出した。さうして早く行きたさに電車を待つた。大阪行ばかり來て、神戸行は一つも來ない。終ひには、しんきくさくなつてくるし、待つ人は、ずんずん多くなるばかりであつた。

「あアあ」

と、私はたいくつになつて来て言つた。たへかねた私は、電車が来るかと、あちこちを、田舎の人のやうに見まはすと、向ふから電車が来た。はつとして、止つたところに見て見ると、「箕面行」としてあつた。私はがっかりした。

「えへん、えへん」

と、私はせきのまねをしてゐると、驛長が笑つてゐた。びつくりして向ふを見ると、こんどこそは「神戸行」としてある電車がきたので、喜んで飛乗るやうにして乗つた。ずんずん行く電車の中で、ひさつちやんの櫻の枝を持つて、窓のところに立つて見てゐた。

「次はみかげでございまあす」

といふ聲がした。六甲山へ行くけいかくは、みかげからだつた。喜んで驛を待つた。なんだか其の間が長いやうな気がした。早くいたいきへ登りたいな、と思つて、窓の外の景色を、運轉手臺の所で見ると、運轉手が、
「嬢ちゃん、どこへ行かはりますの」

といつた。私は面白くて、恥づかしくて、

「六甲山へ」

といつた。なんだか其の言葉が、乗つてゐる人皆に、恥づかしく思はせるやうな気がしてきた。みかげで降りると、貴ちゃんが、

「敏子ちゃん、顔まつ赤や。あんだだけ位でやられとる」

といつた。正ちゃんは、

「敏子ちゃん、あいて運轉手やのに」

といひ、「敏子ちゃん、あんなに、ていねいにものを言うたことないのに、おら感心した」といつた。

貴ちゃんは、立札のやうなものを見て、

「早かつたら、歸り有馬の温泉へ行かう」

といつた。又ひとかさなり、うれしいことがふえたやうな気がした。喜んで改札口で切符を渡して、驛を出た。なんだか気がせいせいして来た。先づ貴ちゃん、ふみ切りを渡つて、ふみきり番に道をきいた。すると、

「かうかうで、ここを歩き、東へまがり、行かはずたら水車七つほどありまんねん。はつきり知りまへんよつて、そこからわからへんかつたら、人に聞いて下はれ。大ていさうやと思つてまつさ」

といった。貴ちゃん少し進んでから、

「あの人の説明やゝこして、わからへん」

といった。買つてきたキヤラメルをねぶりながら、

「早よ登りたいな」

と、ひさつちやんや、正ちゃんにいつた。時々は、

「もう、どんだけほど」

ともきいた。

「ええ景色やな。あこまで登ろ」

と、あたたかいのに、雪にうづもれてゐる、いたゞきらしい山を見ていつた。しばらくすると正ちゃんが、

「ここまがるのやろな。東へまがれて言うてんもん」

と言ひ出した。そこで、荷車を引いてゐる人に聞いて行きはじめた。わからな
いと、人に聞いたらよいやうな気がしてきて、うれしく思つて来た。八人ほど
の人に道を聞いて、ずんずん行つて、ふもとまでくると、水のたれてゐる橋が
あつて、氷がたつてゐるやうに見えるつららがあつた。一生懸命に登つて、石
がある所までくると、貴ちゃんは、

「寫真とらう」

といつて、私が石にすはり、兩がはへ、ひさつちやんと正ちゃんが立つた。
せいりをして後から氣がつくと、三人で寫真をとれば、真中のものが、早く死
ぬといふことが思ひだされて、心配にもなつたが、一生懸命で登ると、雪の少
しある所へきたので、いたゞきともちがふのに、「ばんざあい」と叫んだ。

上つていつて人に聞くと、「まだ、かかりだな」といはれて、腹が立つた。
とうとういたゞきへ上つて見ると、雪が一尺七八寸もつもり、風のかたがつい
てゐた。其の中へ飛びこんだら、すねの少し下のところ位までも、はまつた。
寒くてふるえる位で、靴下が雪でべちやべちやだつた。下りはするすると、兩

がはも見ず走つて、ふもとについた。

【五】人物の描寫

まづ第一に、人物の描寫のお粗末なことに氣がつく。お粗末つたやうな氣がする。貴ちゃん、正ちゃん、ひさしちゃん、お父さん、お母さん、友ちゃん、私の七人の人々が出てくるが、読んでゐて、それ等の人々の様子がどうも浮んで來ない。貴ちゃんは、日本アルプスにも登つたのだといふし、この一行の中心にもなつてゐることは解るが、さて幾才位の人だらう。正ちゃんが、

「貴ちゃん、おれなら行けるだろ。もう奈中の二年生やぞ」

と言つてゐるところから察すると、貴ちゃんはどうかやら中學生ではなくて、それ以上の學校にゐるか、それともどつかに勤めてゐる人のやうにも思はれる。これは春休み中のことだと言つてゐるのに、「二十二日は休みだし」と貴ちゃんが言つてゐる。私の學校は二十日からお休みだから、この時丁度休んでゐたことになるが、中學若しくはそれ以上の學校で、「二十二日は休みだし」といふ言葉が、どうも少し變な氣持がする。その邊の様子がびつたり來ない。それから、貴ちゃ

ん、正ちゃん、ひさしちゃん、私の四人のうち、「私」だけが女で、そして歳も一番小さく、尋常五年になつたばかりだが、その邊の様子も、文の上では解らない。尋常五年になつたばかりだと、一寸言つてはゐるが、読んでゐると女學生位に思へて來たりして、はつきりしない。この文では、「お前は弱いから六甲山へはとても駄目だ」といふ意味になつてゐるが、この子供は、山登りの出來ぬやうな、身體の弱い子供ではない。この場合は恐らく、お前はまだ小さいのだし、女だし、さういふ人達に交つて行くことは、無理だらう」といふ意味であつたらうと思はれる。さういふ工合に出てくると、この一行の様子も、この子供が行きたいと言つて、すねたりするあたりのことも、もつと味のあるものとなつて、出るだらうと思ふ。

この作者は、四人の人々の對話については、可なりよく出してゐる。しかし、人々の關係を、一向念頭においてゐない。それでは折角の對話が、利き目を弱くして終ふ。読んでゐて、どうもしつくりしないで、がさがさする感も、過半はそこから來てゐると思ふ。

それから、人物関係について、もう一つ大きな手ぬかりがある。といふのは、この人達は兄弟でもあるのか、それとも親類か何かであるのか、その邊の様子はつきりしないことである。みんな一軒の家に住まつてゐるやうで、お父さんお母さんが出て來たりするので、兄弟のやうにも思へる。しかし、言動を見ると、そのやうでもない。

「敏子、お前今日お父さんと、さきに奈良へ歸るか。友ちゃんと後から歸るか」といふ父の言葉がある。

「そらお父さんと歸るが。おんなじ六甲山へ連れてもらはぬのやつたら、待つててもし、やうがない。連れてくれんのやつたら、やつぱり今すぐ歸る方がええわ」

といふ「私」の言葉がある。このへんの様子からも、どうもその人々の関係が、はつきりしない。

事實は、この四人はそれぞれ従兄弟関係で、休暇になると、みんな斯うして誘ひ合はして、葦屋の別荘へ出かけるのである。家では、この子は一人娘で、この

子の下に弟が一人ゐるだけである。この文のどこかに、一言でもさういふ説明があつたら、一行のことがよく解つてくると思ふ。

とにかくにも、作者が自分の心の中で、一人だけ解けてゐることを、そのままつんつんかいて行くことは、一般に描寫を淺くする。自分だけの日記ならそれでよい。しかし、文章として纏める場合には、それではいけない。前に「描寫の深さ」のところでも言つたやうに、その場、その場の場面を、それらしく生かすことに、氣を靜めて用意しなければならぬ。氣を靜めて用意するといふ態度は、なかなか出來にくい。一つ一つの批評を聞いて行くうちに、それがだんだんに出來て行くのである。五年生の初期あたりのものは、總じてかういふ缺點を多く持つ。尙もう一つ。これは人物描寫のこととは少し意味が違ふが、似よつたことだから、こゝで述べておく。つまり、この學年位の子供の綴方では、よく主語が抜かされてゐるといふことである。例へば、

ずんずん行く電車の中で、ひさしちやんの櫻の杖を持つて、窓のところ立つて見てゐた。

と言ふやうな形のところである。こゝを読んで、さてそれをしたのが誰なのかわからぬ。前後の関係から、讀者の方で、それは多分誰だといふ推定をして行くから、解ることは解るにしても、その場の様子が、直に見えて来ない。子供はかういふところを、よくう、つかり、抜かす。文章の形としても、これは注意すべきことである。

【六】文章のスタイル

話が文章の形のことになりかけたから、ここで少しそのことを話す。

一體に、ぬけてならない所で、主語がぬけたり、客語がぬけたり、その間の関係がはつきりしなかつたりするのは、文章がだらだらと續いて、適當な區切りをもたないからである。子供はよく、そして、ので、から、そして、ので、から、でいくらでも文章を續けるくせを持つてゐる。子供に限らず、文章に慣れない人は、大人でもそんな風にかく。これは、關係を不明にするといふこともだが、讀んで讀みづらく、調子がすらすらとしない。文章がよいと、内容はそれ程でなくとも、語感が快い。文章の魅力は、讀者の心を靜かに快く、次へ次へと、引すつ

てゆく。

とにかくにも文章は、よく切らせることがよい。そして、ので、から、は止むを得ぬ場合にだけ使ふのだと、心得させるがよい。文章がよく切れてくると、ぬかしてならないものに、自然氣がついてくる。關係の分明にも氣がついてくる。語呂のよさ悪さにも氣がついてくる。それ等に氣が付き出すと、文章にスタイルが出来、調子がよくなつてくる。前に出した「一人旅」は、文章からいつても、非常に感のよいものだつた。そのことは前にもいつたが。

尙、この「六甲山へ」から例をひいて、言つてみる。

「えへん、えへん」と、私はせきのまねをしてゐると、驛長が笑つてゐた。びつくりして向ふを見ると、こんどこそは「神戸行」としてある電車が来たので、喜んで飛乗るやうにして乗つた。

といふところがある。若しあすこのところが、次のやうにかけてゐたら、どうだらう。

「えへん、えへん」

私はせきのまねをした。驛長が私の顔を見て、笑つてゐた。向ふから電車が来た。

こんどこそは「神戸行」と、しるしてあつた。私は喜んで、それに飛びのつた。この二つを比べてみて、後の方に、多少でも文章のよさが出たとしたなら、どこにどういふものを入れ、どこにどういふものを抜いたからかと言ふことが、解つてもらへると思ふ。

これを直さうとして、一寸どうかき直してよいか迷つたところが一つあつた。「びつくりして」といふ言葉のところである。「驛長がわらつてゐた」そこで文章が切れ、「びつくりして向ふを見ると、こんどこそは」と續いてゐる。そのびつくりして、といふのは、文章の形からいふと、何かの音にびつくりして、向ふを見るといふ意味のやうになつてはゐる。しかし、先刻からもう來ないか、もう來さうなものだど待ち草臥れてゐる、そこへ電車の音がして來たのだから、びつくりする筈がないと思ふ。それなもので、そのびつくりしてが、どうもはつきりしない。讀んでゐた時には、驛長が笑つたのを見て、びつくり（きまりが悪い意味で）

したものだと、私は思つてゐた。ところが直さうとして、丹念に見ると、驛長が笑つてゐた。のところ、○が入れてある。さて、これはと思つて、讀んでみると、びつくりしての意味が解らなくなつた。本當にびつくりしたものなら、それに相當した條件が出てこなければならぬ。かういふところも、文章の形に興味を持ち出すと、だんだん氣のついてくることである。その次の、
すんすん行く電車の中で、ひさしちゃんの櫻の杖をもつて、窓のところに立つて見てゐた。

といふのも、

電車はすんすん走つた。私はひさしちゃんの櫻の杖を持つて、窓のところに立つて外を見てゐた。

とか、

電車はすんすん走つた。私はひさしちゃんの櫻の杖について、立つて窓の外を眺めてゐた。

とかと直してみる。これで文章のスタイルが、餘程變る。「すんすん行く電車の中

で、」と言つてゐるが、電車に乗つてゐることは解つてゐるのだから、「中で」といふ言葉は不用である。それに氣づかないのは、文章がただらだら續いて切れないからである。先刻もいつた通り、原文では主語がぬけてゐるために、櫻の杖を持つて立つてゐたのが、誰だか浮んで來ないが、

「電車はすんすん走つた」

または、

「すんすん電車が走つた」

として、文章に區切りをつけると、その次は自然に、

「私は」

と、かう出てくることになる。

文章の形に捉はれることは、勿論いけない。しかし、文章のスタイルに氣のつかないのは、文章の美に氣づかない、幼稚さである。このことは間違はないやうに指導しなければならぬ。形の上からのみ、文章をやかましくいふと、文章は伸び伸びしなくなる。變則な文章が却つて面白い場合が、いくらかもあるのだから。

私の言つてゐるのは、文章の調子、つまり姿のことである。

【七】場面の描寫

次に場面の描寫のことに移る。これは、前に「描寫の深さ」のところでは話したことなので、あすことを思ひ出して貰ふことにする。「六甲山へ」にも、その缺點がはつきり出てゐる、初め、

もうじき五年生になるといふ春休みのことだつた。夕方、庭さきで遊んでゐると、貴ちやんが、

といふ風にかき出してゐる。さうして、不意にまた正ちやんが飛び出して來たり、ひさしちやんが飛び出して來たりしてゐる。この關係が、さつぱり解らない。庭さきで遊んでゐたのが、作者一人ではなくて、それ等の人々と一緒にゐたもののやうでもある。さうするとどうも貴ちやんの年齢や職業が、讀者の方へびつたり來ない。これは前にも一寸言つたことだが。或はまた、この子供が庭さきで遊んでゐた所へ、貴ちやん達が來て、そんな話が始まつたものともとれる。最初の「庭さきの場」がはつきり出てゐないからである。その調子で、ぐんぐん進むものだから、お終ひまでとうとう「人物關係」が解らず終ひになつて、讀者にあき

足りない感を持たせることになる。

先刻もいつたやうに、場面の描寫は、描寫の大切な條件である。場内場面の描寫が荒つぽいと、文全體がごたごたとして終ふ。綴方は、筋さへ解ればよいといふ記録とは違ふのだから。

その他、お父さんやお母さんの出てくる所、「私」が、こたつに馬乗りになつてすねるあたりなどにしても、場面の様子が一向に浮かんで来ない。これはこの子だけでなく、先に出した「お祖母さんの死」などにも、その缺點が、そちこちに出てゐた。この點「お使」は、なかなかよく、むしろ届き過ぎる程出てゐた。比較してもらへると、その邊の呼吸がよく解つてもらへると思ふ。

【八】季節の描寫

季節の描寫の不行届も、この文での大きな缺陷となつてゐる。初めに、「もうちき五年になるといふ春休みのことだつた」といつてゐるのだから、その積りで讀めばよいのだが、次の行になつてすぐ、日本アルプスへのぼるといふ話が出て、二十二日に六甲山へ登らうといふことになる。私の頭に、登山といふと夏を思ひ出す先入觀念があるからか知らないが、そこを

讀んでゐる間に、前の「春休み中」といふ季節を忘れて終ふ。そこへ、こたつに馬乗りになつたといふことが出てくる。それから、六甲山の頂上で、雪が一尺餘りも積つてゐて、踏み込むと、脛の下近くまで埋つたといふことが出てくる。季節としては、それだけのことしか出て来ないもので、讀者の頭が、始終季節のことから離れてゐる。それなもので、ぼつん、ぼつんと、こたつのことや、頂上の雪のことが出る度、何か突然な氣持から、「一體こりやいつの話だ」といつた疑問を持つ。春休みだと初めに言つてくれてはゐるのだが、感じの上で、とうとうお終ひまでその不満が満されない。つまり季節についての描寫が行き届かないからである。季節は、人間の身のまはり、食べもの飲みもの、自然物自然現象などを、すつかり變へる。人間の生活模様もかはる。自然また話の中、行の中にも季節が出てくることになる。強ひて意識的にそれをかゝせようとするのではない。落ちついた態度で描寫をしてゐると、そのことが當然出て来る筈である。殊更に、空を見るとどうだつたとか、木の芽がどうだつたとかいふと、文章は全くきざになつて、自然らしい姿を失ふ。故意にさうすることは、拙劣な描寫である。六甲山

へ登るといふそのことばかりを意識して、それだけの筋をぐんぐん押して行かうとするから、境遇場面のことが意識に上つて来ないのである。事實その途上では季節に關する経験が、いくつかあつたに違ひない。それでゐて、綴方に書くときには、只もう先を急ぎ過ぎて、その餘裕を持たなくなるのである。態度が出来てくるに連れて、かういふ失敗はだんだんなくなる。五年の初期あたりは、その失敗の非常に多い時だらう。

【九】表現の完結

それからもう一つ、この文を読んで終つた時に、誰でも感じるであらうことは、惜しいところで終つたといふ、物足りなさだと思ふ。なる程、題は「六甲山へ」となつてはゐる。嚴密に言へば、作者は六甲山へ登るまでのことを書きたかつたので、その後のことまでかく意志はなかつたのだといふことにはなる。しかし、この文は、

「下りはするすると、兩側も見ず走つてふもとについた。」ところまでかいてある。してみると、さういつた嚴密な立場から書いたものでもなさうである。

初めは大變な元氣でかきかけ、表現も相當詳しい。ところが、愈々登らうとい

ふあたりからは、非常にだれてきて、一足飛びに頂上につき、また一足飛びに降りて終つてゐる。下るのはそれでもよいとして、あれだけ楽しみにした山登りが、いよいよ楽しみみな山にかゝり出した所から、略記になつて終つたのでは、肝心のところを惜しいこととしたといふ感がする。これは、作品初期によくあることだが、材料の研究をしないで、唯、あのことをかかうと漠然と思ひつき、まづ出來ことの初めから、丹念にかき出す。かき初めた時には、その元氣で終ひまでやり通す氣持なのではあらうが、そのうちに精力がつかきて、うるさくなつて終ふ。

「山に登つてからのことで、かきたいと思つてゐることはない？」と聞くと、

「ええ、それはありますけど」と答へた。

全くさうだらうといふ氣がする。何をかかう、そのうちのどれに一番力を入れよう。そして、前後はどのくらゐな程度のものにしよう。といふ、見積りをつけてかからなかつた證據である。遠足のことをかく場合にしても、先づ遠足前夜の

ことからかき出す。中には學校で習つてゐる時からのことをかき出し、歸りに家へ走つて歸るあたりに力を入れ過ぎて、さて肝心の遠足の段になると、一足飛びの筋がきで済んで終ふ。さういふことが、子供の初期の綴方によくある。一つの綴方は、一枚の繪、一つの器、一輪の花、と同じに、出来上りが、ちゃんと表現の完結されたものでなければならぬ。土瓶の胴だけは、どんなに藝術的に出来てゐるにしても、蓋がなかつたり、口がついてなかつたりしたのでは、整つた美形を持たない。道理はそれと同じことである。

この子供は、山の登り口迄に十二分の力を注いでゐる。もう少し落ちついた態度で、あつて邪魔になる分と、なくてはならぬ分との取捨を行つて、さて後にゆる鉛筆をとつたものなら、十二枚もあれば相、完結したものがかけると思ふ。それから、初めの方では、弱いから六甲山へは連れて登らないと言はれて、「私」が随分すねてゐる。その氣持から行くと、元氣に登山が出来た時、周圍に對してまた自身自身に對して、多少の得意、自信、が起つただらうと思ふ。その日は疲れて、さういふことがはつきり感じられなかつたにしても、家で待つてゐてくれ

た母親などから、何か一寸したことを言はれた拍子に、ふつと鼻の高い感が起つたりしさうなものだとも思はれる。その邊の呼吸は、前述の「一人旅」に、誠にうまく出てゐると思ふ。全體に力がはいつて、手際よく完結してゐるところ、「一人旅」は矢張り、上の上である。

【10】進歩のあと

さて、この「六甲山へ」の作者が、六年生のころには、どの位のところまで表現が進んだか。六年生のころの、同じ作者のものを、次に出してみる。或日この子供の親類達が、奈良ホテルで晚餐會をした。それに出るために、この子供は従妹の富美ちゃんと連れて、家を出た。その時のことをかいた綴方の一部分である。

「やあ、うれしい。敏子ちゃん」

富美ちゃんが、私の顔を見上げて言つた。ブーブーと自動軍が行き去つた。白い煙がもくもくと立つた。もう荒池のそばだつた。ホテルが池の水にうつつて、小さい波に影がゆれた。生駒山が紫にうすく、所々に火がちらちらと見えた。

「あした天気やな。夕やけや。」
と、富美ちゃんが言った。

きれいに敷いた砂利の上を、さくさくと、二人は光つた靴を見つめながら歩いた。

「あんまり磨いたら、あほらしいな」

「何んでやの。けつたいな子」

「それでも泥ついたら、もともとや」

富美ちゃんは驚いたやうに、段から芝生の上へよけた。私もついてよけた。きれいな西洋人が、二人並んで歩いて来たのだつた。

「やあ、女と男と。山中さんやつたら、二人組やて言うて笑ははるところや。

おまけに太いのんと細いのんと」

と、私はささやいた。私は思はずふき出しそうになつたが、

「そや、今笑つたら日本人の禮儀にかゝはる」

といつて、唇をかんでこらへた。こらへるとよけい面白くなつて、

「ふつふ」

と笑つた。すると富美ちゃんも一緒に、

「ふつふつふつふつ」

と、口をおさへて笑つた。富美ちゃんえらい氣どつてと思ひながら、立つてゐた。(後略)

これと「六甲山へ」を比べてみて、一年半の修養が、この子供の表現力を、どれだけ進めたかが、解つて貰へると思ふ。人物、場面、時刻、事件、ともに、ここまで進んでくれば、立派に綴方になつて来たといへる。廻りくどいことを、くどくと言ふのでなく、手短かに言つて、而もその場面をよく生かしてゐる手腕も、これなら大丈夫だといふ氣持がする。

プープーと自動車が行き去つた。白い煙がもくもくと立つた。

ほんの一言に過ぎないが、「白い煙がもくもくと立つた」といふ言葉は、自動車の行去つた後の、ホテル近くの道をよく表現してゐる。讀者はこれで十分想像出來

る。

ホテルが池の水にうつつて、小さい波に、影がゆれた。といふ、「小さい波に、影がゆれた」も、池の水にうつつてゐるホテルを、なかなかよく生かしてゐる。殊にその次の、

生駒山が紫にうすく、所々に火がちらちらと見えた。

「あした天気やな。夕やけや」と、富美ちゃんが言つた。

といふ描寫ぶりは、非常に優れてゐる。讀者の方では、これだけの言葉で、時刻のことも、天気模様のこと、よく想像出来る。といつて、作者が、ここで、天気のことをかかう、時刻のことをかかうなどと、意識してかいてゐるらしい骨折りは、少しも見えない。無理のない自然な感じで、すらすらと来る。而も、子供らしい無邪氣さが、いかにもそれらしい感で流れて来る。立派なかきぶりである。次にもう一つ、同じ作者の別な例をひいてみる。或朝起きたところを、弟から悪戯され、それがもとになつて、二人はにらみ合

ひになる。さうしてゐる所へ、従妹の富美ちゃんが、その兄さんと連れて遊びに来る。その時のことをかいたものの一部分である。

(前略)

四人で遊んでゐた時、弟が、

「何かしようさ」

と言つた。

「なにしよ。するもんないが」

と、富美ちゃんの兄さんが言つた。富美ちゃんが、

「あるわ、あるわ」

といふので、

「なにあるのん。なにあるのん」

と、私はせき立てた。

「あのな、坊主めくりをしよさ」

「えゝわ、えゝわ」

「いつたろ、いつたろ」

と、弟が言つた。私は元氣づいて、

「きつと勝つわ」

といひながら、箱を出して来て、札をくり始めた。

「一寸僕、便所にいつてくるわ」

と、弟が立つた。

「ほんなら僕、その間に、ミットにええもん塗つてくるわ」

と、富美ちゃんの兄さんも立つた。私と富美ちゃんは、いやいや、

「よつしや」

と言つた。待つてゐる間に富美ちゃんは、

「あのな、とし子姉ちゃん。えゝことあるわ」

「なにやのん」

「あのな、自分等二人のところで、お姫さん出るやうにしとくやろ。そしてな、洋ちゃんとか、天神さんと坊さんばつかしおいとくねん」

と言ひ、言葉をつゞけて、

「又兄ちゃんとかへはな、けつたいなしるしの、坊さんおいとくねん」と言つた。この話を聞いて、私は、

「よつしや、よつしや」

とさげんだ。

「大きい聲出したらあかんで」

「ふん、ふん。早よよりわけよ」

「お姫さんこの場所、天神さんはこの場所、坊主はこゝやねんで」

「よつしや」

「私、伊勢大輔、それから清少納言と、紫式部ともらふわ」

「ふん、ふん」

「始める時、ちつこいもん順と言ふのやで」

私は言つて、重ねはじめた。

「一に洋ちゃん取る。天神さんや。二番は私やし、お姫さんや。洋ちゃんの天

神さん取り上げられるわ」

「次ぎ私わたしやないか。そしたら私わたしお姫さん出ても、あんた取つたら、もらへへんやろ」

と、ぐすぐすしてるまに

「もう塗つてん」

といつて富美ちゃんとみちゃんの兄さんが、はいつて來なさつた。弟も出て來た。二人はびつくりして、その札をむちやむちやにしてしまった。(後略)

割合複雑な内容のものを、不満なしに読ませるところが豪いと思ふ。上手にかきこなしてゐて、對話なども面白くかけてゐる。

【二】綴方の四つの要素

要するに、人物、場面、事件、時、の四つは、綴方の要素である。その中のどれが缺けても、綴方は不整形に終る。「時」といふ背景の前に、場面が浮かんで來て、そこへどのやうな人々が出て、どのやうなことをやるかと言ふ、そのことが解らないのでは仕方

がない。色、形、香、音などの表現要素は、それぞれ、人の持味によらう。しかし修養の結果は恐しい。今迄「自動車が行き去つた」といふ場合に、ブーブーといふ観念的な音と、勢よく走る車とだけしか見えてゐなかつたものが、修養の結果、走り去つた後の、「白い煙がむくむく」といふ、色と形が見え出すやうになる。自動車を意識して、観念的なブーブーや、勢よく走る車だけしか浮ばない時代のものは、自動車の來たのを見て、無暗と逃廻つたであらう、が、さつな感じが、第一飛んで出て來る。しかし、通り過ぎた後の白い煙が思ひ出せる頃のものになると、しつくりと落ちついた情景になつて出てくる。心はさうして鍛はれて行き、鍛はれた心が、さうしてよい表現を産む。綴方の修養は、楽しみである。

【三】よき表現の例

尙、別な子供の綴方の中から、よき表現の例を二三引いてみる。遠足の日のことをかいたものの中に、

「只今」

といつて、私は家にはいつた。奥から、

「おかへり」

といふ聲が聞えた。私はうちらへはいつて、

「あゝあ」

と、軽いかばんをおろした。

といふところがある。「あゝあ」と言つて、軽いかばんを下した。といふ釘が、なかなか、よく利いてゐる。朝出がけには、辨當やらお菓子やらで、うんとこさと重かつたかばんを、「あゝあ」と言つて、軽くおろすところ、これで疲れてゐる様子も出るし、面白い。

また別な子供の綴方に、友達と二人で私の家へ訪ねて来た時のことをかいたものがある。私の家ではテリヤ種の犬を、座敷飼ひにしてゐる。この種の犬の特徴通り、非常に神経質で、外部の物音にも敏感だし、聞きつけると、きつい聲を立てながら、一目散に飛んで出る癖を持つてゐる。二人はその犬が怖いので、「あんた先にはいり」「あんたはいり」と、押し合つた後、静かに露次をはいつた。そして、音を立てないやうに、さうつと歩いて、家の前に来て。その次のところ、

「池田先生」

と、小さい聲で言つて、二人は格子戸によりかゝつた。

「ワンワンワン、キャンキャン」

と、きつい犬の聲が、近くに來てほえつゞけたが、すがたは見えなかつた。

「どこにゐるのん」

二人はおそろおそろの聲の方を見た。垣根の黒い板塀の下から、ほそ白い、四本の足が見えた。

としてあつた。垣根の黒い板塀の下から、ほそ白い、四本の足が見えた。が急所をついてゐる。テリヤ種のは、胴も足も細い。おそろおそろの聲の方を見ると、その足だけが、板塀の下から見えた場面が、面白く想像される。

ある子供の綴方に、母親の留守の間に、お菓子の箱を見つけ出し、姉（女學校三年）を誘つて、二人でぬすみ食ひする所を、材料にかいたのがあつた。その中の面白い部分をぬきがきしてみる。

私は足をなげ出して坐つた。よく光る箱の角をもつて、そつとあけてみた。思